

## 訳注・ノート「マオリ」の民話

井上英明\*

はじめに

本稿の全容は *MAORI FOLKTALE in Maori and English*—Introduced and translated by Margaret Orbell (1968, Wellington, NZ) に採集された二〇篇からなる民話のテキストの「全文」、「原注」、「序説」、「マオリ語テキストの出典」の全訳と訳注とからなる。

原著は、井上英明訳注『マオリ神話』(サイマル出版、1982) —Anthony Alpers, *Maori Myth and Tribal Legends*, 1964. —改訂版『ニュージーランドの神話』(青土社、1990) の後を承けて、今度は Folk tale (民話) の紹介であり、他の類書にくらべ、きわめて学術的に確実な原典による邦訳である。私の前著二冊はマオリ人の伝えた『神話と伝説』であるが、本稿で発表するのは、だいたい 1840 年以降ニュージーランドの現地で採録された「民話」である。前著と同じく、本書も本邦では未公表のものであろう。

つぎに本稿の成立について一言しておく、以下のごとくである。

オーベルの本文は左にマオリ語本文、右にその忠実な英語訳が掲げられ、一応、マオリ語原文と英文との対訳形式となっている。2002 年以来、本学大学院人文学研究科の「比較文学演習(日・英語圏)」で、私がとりあげたテキストである。参加した院生は三井高志(博士課程後期)、中村貴博、富村僚子、安森博司(以上三名は博士課程前期)の諸君である。毎週輪講の形式で各院生がマオリ語の英語辞書を繰り、各語文の英訳を解きほぐしていく作業がまる三年間も続いた次第である。直接指導に当たった私自身の解釈によるものもたくさんあるが、とくにマオリ語の訳解についてはニュージーランド人の Paul Robertson 教授の教示に負うところが大きい。

また、成稿に当っては三井高志君が原テキストと輪講での訳文を厳密に読み合わせ、不適訳を訂し、修士課程を修了して社会人となった中村貴博君の協力のもとにタイプを打ち、完成した。もちろん、内容についての全ての責は指導教授の私に帰す。

本誌に掲載するのは、「テキストの全訳」と「原注」の全訳の部分であり、他に著者オーベルの「序説」と「マオリ語の出典」の紹介と私共の行って来た「訳注」と私自身のマオリ語についてのかんたんな解説は、本誌とほぼ同時期に刊行予定の本学共同研究論集第九輯(共通テーマ「現実と理想」)に掲載の予定である。本稿のいわば「研究篇」といってもよい。併せ読んでいただければ幸いである。また、本誌にはオーベルの *MAORI FOLKTALE in Maori and English* には載せられていない物語を二編収録している。これらの物語はマオリの民話を検討する上で、興味深い素材となりうるものであり、混在を承知で本誌に掲載する

264  
(17)

\* 言語文化学科 教授 日本古典文学

次第である。出典については、タイトルに併せ記載した。解説やその他の異話については、同様に本学共同研究論集第九輯（共通テーマ「現実と理想」）に掲載の予定である。

ポリネシア圏で最も体系的な構造をもつマオリ神話と各部族に伝承された「民話」の数々は、話柄の核となるべきものに、日本の『記』・『紀』における神道的宗教観や各地に聴く昔話に類似するものが多い。その意味で本稿は日本とポリネシア圏の比較神話の一部となるものと思う。

マオリの民話は『イソップ』や『グリム』や他の民話・寓話・昔噺の類とはちがって、筋立がきわめて唐突に展開する場合が少なくない。そこには合理的、常識的には完全な理解を拒む「何か」がある。「共同論集」所掲の別稿で触れるが、この「何か」はマオリ人の宗教観や生活習慣における一種のコードのごときのものである。このコードを一言で表すなら、それはイギリスの民族学者、コドリントンが著書『メラネシア人』（1891）の中ではじめて名付け、紹介した mana と称される呪術的信仰である。この mana は英語その他の欧州各語や日本語訳になりにくいものとされ、たんにマナと呼称されて宗教・神話学界に広く知られている。マナは宇宙に遍在する非人格的・超自然的な「力」であるが、その意味体系は唯一レヴィ＝ストロースの言語学的解釈が有効とされるだけで、学問的定義は不可能という他ない。しかしこの mana は未開社会のみではなく現代の文明社会にも、人間の心の中に存在し、太古からの人間のこころの闇の中に一種の霊的威力として在り、それは今だに、いや益々われわれの社会を支配しているかのようである。

なおマオリ語の辞書はまだ日本語版がないので、つぎの代表的な英語版を使用した。

- M. A. Herbert, W. Williams, *A DICTIONARY OF THE MAORI LANGUAGE*, 1957.  
 B. Biggs, *COMPLETE ENGLISH~MAORI DICTIONARY*, 1980.  
 B. Biggs, *ENGLISH・MAORI MAORI・ENGLISH DICTIONARY*, 1990.  
 P. M. Ryan, *THE REED DICTIONARY OF MODERN MĀORI*, 1995.

文法書は主として Bruce Biggs の *Let's learn Maori* (New Zealand, 1969.)  
 と K. T. Harawira の *Teach yourself Maori* (New Zealand, 2002.)  
 を使用した。

最後に、出典に関しては、オーベルの記載に従い、文中では著者と年次を記載するに留めている。年次の後ろに付けたアルファベットは、同年に出版された本と区別するためのものである。詳しい参考文献は章末の Works cited を参照していただければ幸いである。さらに、英文表記はイタリック体に変えた方が読みやすいが、あえて原著の書体のままにしている。

	頁
アリとキリギリス .....	3
黄泉の国から戻った女 .....	4
ピロンギアの妖精話 .....	6
人殺しのヒヒオトテ .....	7
ロナ、月の女性 .....	8
弟の妻を欲しがった男 .....	9
二匹のタニファの話 .....	12
テ・カナワと妖精 .....	12
チタブの仕返し .....	13
女とガララ (第一ヴァージョン) .....	14
女とガララ (第二ヴァージョン) .....	16
少年と豆の莢 <small>まめ</small> のカヌー .....	17
ちっちゃなチエケ、踊る泥棒 .....	19
霊にとり憑かれたイフ・ラヒラヒ .....	19
少年とハト .....	20
鵜 <small>う</small> の女、ホウメア .....	22
パオワと魔女 .....	25
ブンガレフとハワイキの人びと .....	28
ヒネ・ポウポウ .....	31
ヒネ・ポウポウとテ・オリパロアの物語 .....	32
注 .....	38

## アリとキリギリス

### THE ANT AND THE GRASSHOPPER

A. W. Reed, *Maori Fables*, London and Prescott, 1964. (pp. 13-14)

ポポコルア (popokorua : アリ) は、いつも忙しそうに木々の樹皮の隙間や、地上に顔を出した木々の根っこの中に、食べ物を集めていた。ポポコルアは、キキヒ (kikihi : セミ) のその日暮らしの生き方を気にしていた。キキヒは行く末のことなど考えもせず、毎日一日中日向ぼっこをして暮らしていた。

「おいおい、きみ！」とポポコルアは言った。「大地が凍てつき何にもなくなる冬に備えて、食べ物を貯えることに精を出そうよ」。

キキヒは騒々しく鳴きながら笑った。「そんなことよりずっと良いことがあるさ。おれとお日様の下に登って来いよ、そうすればタネ (Tane : 森の神) を称える歌を歌いたくなるさ」。

ポポコルアは、キキヒが忠告に全く耳を傾けないことを知ると、キキヒを無視して、黙々と食べ物を集めることに精を出した。ポポコルアはそっと歌った。「急げ急げ、ねえ、き

み！ぐずぐずするな。ポポコルアの仕事は始まった。天から降りそそぐあの雨から、夜毎刺すようなあの寒さから、身を守る隠れ家となる穴を作ると、また、そこに命を支える胃袋の糧となる種子を集めるようにと、本能が駆り立てるんだ」。

ほどなく、ポポコルアは穴の中になっぷりと食糧を貯め込んだ。キキヒはポポコルアを見下ろした。「なんて馬鹿な奴だ。奴の生活に楽しみなんかありゃしない。おれの処にやって来て、一緒に歌を歌うよう説得できればいいんだが」。

キキヒは歌を歌うために羽と足を擦りあわせた。「本当に楽しいのは何？それはごろごろして、羽だけ動かして、お日様の下、枝の上で日向ぼっこすることさ」こうしてキキヒは夏の間中をずっと歌いつづけた<sup>1)</sup>。

## 黄泉の国から戻った女

### Ko Pare rāua ko Hutu

語り手：ワイカトのハリアタ 一八六六年

むかし、一人の高貴な身分の女<sup>2)</sup>がいた。部族の者たちは、この女に求婚者たちがよりつかないよう四六時中つきっきりで見張った。女の名はパレ (Pare) と書いた。パレは彫刻がほどこされた家で暮らしていた。パレの家の周りは三重の柵で囲まれていた。パレが未婚のままなのは理由があった。部族にとって大切な女性であるパレに釣り合うほどの男が部族内に誰一人としていなかったからだ。

パレの食事は、三人の侍女の手を通して運ばれて来た。その住まいはカワカワ (kawakawa) の葉で香りづけられ、内装は最上の品々……上等のタペストリーで縁取られた亜麻の敷物や、たれ飾りや、黒犬の皮の敷物などで飾りつけられていた。

さて、ある日のこと、パレの部族の者たちがムチゴマやダーツに興じていると、一人の貴人が現れ、遊びの輪に加わった。男の名はフツ (Hutu) と書いた。フツはダーツやコマ回し<sup>3)</sup>が大層上手く、遊びに興じる者たちの中で一番巧みにダーツ投げ、コマを回した。みんなはこのフツの腕前に大変驚いた。そして、みんながあまりに大喝采したため、パレがその騒ぎを聞きつけて、家の戸口まで様子を見にやって来た。

フツの投げたダーツが空を飛び、扉の傍に落ちた。パレはそのダーツを拾い上げた。フツがダーツを取りに来ても、パレはダーツを返そうとはしなかった。フツがダーツを返すように言うと、パレはフツに言った。「ぜひ家の中にお入りになって、お話をしましょうよ。あなたを愛しているのですから」。

「すでに妻子がいる身ですから家の中には入りたくありません」とフツは答えた。「あなたをととても愛しています。そんなことは何の問題もありません」とパレは言った。ダーツやコマ回しが最も巧みな者はフツであった。フツのコマはうねりを上げ、ダーツは的の中心を射た。そのため、パレはフツを愛したのだ。

フツは妻子のある身なので家に入ることを拒んだ。しかし、「あなたをととても愛しています。こんなことは問題ではありません」と言って、パレはフツに執拗に迫った。こうして二人は言い争った。フツは家に入りたくはなかったが、そうこうするうちに、パレはフツを強

引に家の中に連れ込み、戸を閉めてしまった。フツが家から出て行かねばならないと言っても、パレはフツを執拗に追いかけた。そうしたやり取りの後、ようやく家の外に出たフツはパレに言った。「わたしが戻ってくるまで、一寸の間ここにいてくれ」。

しかし、フツはパレから解放されるや、すぐさま一目散に逃げ出してしまった。パレはフツが逃げ出して行く姿を見て、フツの背中に向かって呼びかけた。「さよなら、フツ！ 家にお帰り！」。

パレは村へ帰り、家に戻ると、侍女たちに家の内と外を飾りつけるようにと命じ、飾りつけがすっかり終わると自ら首をくくって死んでしまった。

パレが亡くなったことを聞いた部族の者たちは悲しみに暮れ、その死の責任を取って、フツも当然死ぬべきだと話し合った。フツはこの顛末を聞きつけ、パレの家へとやって来た。「パレの死の償いのため喜んで死のう。だが、わたしが戻るまで亡骸を埋葬してはならない」こうフツは人びとに頼んだ。

人びとはこのフツの言葉を受け入れた。こうしてフツは旅立って行った。やがて、「霊の跳ぶ処」(Te Rerenga Wairua)<sup>4)</sup>と呼ばれる場所へとやって来た。そこでフツはヒネ・ヌイ・テ・ポ (Hine-nui-te-po) に会い、「黄泉への道はどこか？」と尋ねた。

ヒネ・ヌイ・テ・ポは、初め犬が降りる細道を指差したが、フツがグリーンストーン (緑石) を差し出すと、ようやく人間の用いる道を教えた。何か良いものを手に入れるために、人を騙そうとするのはヒネ・ヌイ・テ・ポのよく用いる手であった。

その後、ヒネ・ヌイ・テ・ポは、フツのために食べ物を用意した。シダの根を細かく砕いたものを籠に入れ、フツに忠告した。「あの世に着いたら、すぐに食べ物がなくならないように少しずつ食べなさい。あの世で食べ物がなくなったら、決して戻って来ることはできないよ」。

フツはヒネ・ヌイ・テ・ポの言う通りにすると約束した。「おまえが頭を垂れるならば、闇の世界に飛び降りることができるだろうよ。闇の世界に近づくにつれて、下から風が吹き起こり、おまえの頭の上を吹き上げていくだろう。その風に乗れば、足から着地できるさ」。

黄泉の国にたどり着いたフツはパレを探した。フツがパレの行方を尋ねると、「村の中さ」と人びとは答えた。パレはフツが黄泉の国に来ていることを耳にしても、家の外に出ようとはしなかった。フツが人びとにダーツの投げ方やコマの回し方を教えても、依然としてパレは家の外に出ようとはしなかった。そこで、フツは高い木を使ったブランコ<sup>5)</sup>の作り方を教えた。人びとは縄を編み、木のでっぺんにしっかりと結いつけた。縄を引くと、木は地面につくほどしなった。フツは木のでっぺんに座り、一人の男に肩をつかむように命じた。そして、「縄から手を離せ」と人びとに呼びかけた。すると、ブランコは上方へと飛び上がった。

人びとはフツが教えてくれたこの遊びを大いに楽しみ、そのあまりの熱狂ぶりにパレの霊が家の外の様子をうかがいにやって来た。フツはこれを見て喜んだ。

パレはこの遊びが大層気に入り、「フツに肩に乗ってもよいか」と尋ねた。フツは大喜びして、パレに言った。「首にしっかりつかまっています」。

フツは人びとにあらん限りの力で地面につくほどに縄を引くように命じた。「縄を離せ！」とフツは叫んだ。

人びとが縄を離すと、あまりの力に縄は上の世界にまで届かんばかりに飛び上がった。フ

ツは上の世界への入り口にある植物をしっかりとつかみ、パレを肩に乗せたまま上の世界へと登って行った。

こうしてフツとパレはこの世に戻った。二人は村へと戻り、パレの家に帰った。パレの霊がその亡骸に入ると、パレはふたたび息を吹き返した<sup>6)</sup>。人びとはみんな大喜びし、フツに感謝した。そして、二人は結婚すべきだと口々に唱えた。

「わたしの妻や子どもはどうすればいいのだ？」

「パレは二番目の妻にすればいいさ」と人びとは言った。

フツはこの人びとの申し出を受け入れた。こうしてパレはパレ・フツ (Pare-hutu)<sup>7)</sup>として知られるようになった。

## ピロンギアの妖精話

### He Kōrero Patupaiarehe nō Pirongia

語り手：ワイカトのハリアタ 一八六六年

むかしむかし、ルアランギ (Ruarangi)<sup>8)</sup>という男がタファイツ (Tawhaitu) という妻とひっそりと暮らしていた。二人の間には二人の子どもがいたが、ほどなく二人の子どものうち一人が死んでしまった。二人はずっとそこで暮らし、ルアランギは鳥を狩りながら日々を過ごしていた。

さて、ある日のこと、一人の妖精が二人の家にやって来た。妖精は家の中にいたタファイツと子どもを見つけると、タファイツをつかまえ、連れ去ってしまった。ルアランギが戻ると、そこにはタファイツの姿はなかった。「母さんはどこだ？」とタファイツは息子に尋ねた。

「お母さんは連れてかれちゃったよ」と息子は答えた。

ルアランギは悲しみに打ちのめされて、その夜は息子と一緒に泣いた。

その晩、亡くなった子どもの霊がやって来て、家の棟木の上に止まった。「どうして泣いているのですか？」

「妻のために、妻が連れ去られてしまった」。

「お母さんのために、お母さんは連れてかれちゃった」と二人は言った。

「もう泣くのはおよしなさい。どうしなければならぬか教えます。あなたは一つ目の川を越え、つづいて二つ目の川を越えて、さらに三つ目の川にたどり着くまで進まなくてはなりません。そこで火をおこし、豚を捕まえ、炎の中に投げ込みなさい」と子どもの霊は言った。

それを聞いて、ルアランギは家をあとにした。一つ目の川を越え、つづいて二つ目の川を越え、さらに三つ目の川へとたどり着いた。そこで火をおこし、激しく火を焚き付けた。そして豚を捕まえると、炎の中に投げ込んだ。

煙が森の中にたち込めると、豚の焼ける香ばしい匂いが辺りを漂った。タファイツはその煙を嗅ぐと、すすり泣いた<sup>9)</sup>。「この煙はどこから来るのだろうか？ ひょっとしてルアランギから？」とタファイツは一人呟いた。

タファイツはその香ばしい匂いをたどり、ルアランギの許へと戻った。二人は家に帰った。「すぐに妖精がやって来ますから、側にいてしっかりとわたしのことを守って下さいね」とタファイツはルアランギに言った。

はたして、ほどなく妖精がやって来て、タファイツをつかんで連れ去ってしまった。その晩、ルアランギと子どもが泣いていると、亡くなった子どもの霊がふたたびやって来た。

「どうして泣いているのですか？」

「タファイツのために泣いています。タファイツがまた連れ去られてしまった」。

「もう泣くのはおよしなさい。またあなたは行かなければなりません。一つ目の川を越え、つづいて二つ目の川を越え、さらに三つ目の川に行き、いま一度火をおこしなさい。鍋とひょうたんを持って行きなさい。また豚を殺し、火であぶり、鍋に入れて料理しなさい。川へ行き赤土 (kōkōwai)<sup>10</sup>を掘り、その赤土で豚の脂身を料理しなさい。そうして赤土と豚の脂身を混ぜ合わせたものをひょうたんに詰め込んで家に持ち帰りなさい」。

ルアランギは霊から教わった通りにした。ふたたび煙はすすり泣いていたタファイツの許へと届いた。「この煙はひょっとしてルアランギから？」とタファイツは一人呟いた。

以前と同じように、タファイツはその匂いをたどり、ルアランギの許へと戻った。それから二人は赤土を掘った。「急ぎましょう。さもないと日が暮れてしまいます」とタファイツは言った。

二人は赤土を持ち帰り、それを家とマラエ (marae: 集会場) に塗りつけた。ただ棟木にだけは塗り忘れてしまった。やがて妖精がやって来た。しかし、今度はあまり近づこうとはしなかった。妖精は赤土を恐れた。なんとか家の中へと入ろうとして、抜け穴はないかと家の周りをうろついたが、見つけることはできなかった。そこでついに妖精は木を切り倒して、家にたてかけると、それを伝って棟木へと登った。ところがそうまでしたにもかかわらず、家への入り口をとうとう見つけることができなかった。そこで妖精はこの歌<sup>11</sup>を歌った。

ああ、今日という日よ！

むかしはチレニ (Tireni) の恋人がいたのに、

いまや、わたしの心は悲しみでいっぱい。

ピロンギアの住人は消え失せ、

チキ、スクボレ、タブテウルラ、

リピロアイチ、ファナファナ、そしてわたし、テ・ランギポウリ、

みんなは離れて暮らさなければならない。

## 人殺しのヒヒオトテ

### Ko Hihiotote

語り手：北島のガ・プヒ

これはヒヒオトテ (Hihiotote) の話。ヒヒオトテはオタウアに住んでいた。ヒヒオトテは人殺しであった。かつて人びとはヒヒオトテを恐れて、自由にあちこちを旅することがで

きなかった。

ヒヒオトテはオカ (oka: 短剣) で人を殺めた。オカはマイレ (maire) の木で作られ、パケハ (Pakeha: 白人) のナイフのように鋭く研がれていた。ヒヒオトテは家で待ち構えていて、人の声を聞きつけると、分厚いマントを羽織り、オカをつかんで小道の傍に座った。そうして、旅人が現れると、「ようこそ、ようこそ」と挨拶をした。穏やかな態度を装って、挨拶を交わすかのように……。すると、旅人たちは、ヒヒオトテが親切心から自分たちを歓迎しているのだと思い込み、喜んでヒヒオトテに近づいていった。

ヒヒオトテは旅人のうちの一人と挨拶を交わそうとするために、鼻と鼻を合わせ (hongī: マオリ族の挨拶の仕方) たとたん、旅人の喉笛にオカを突き刺した。ヒヒオトテはオカをマントの裾に隠していた。人を刺し殺した後、ヒヒオトテは死体を家に持ち帰り、料理したり、また食料として保存したりした。

このような行いは、マヒア (Mahia) の娘が失踪するまでつづいた。

自分の娘を殺したのはヒヒオトテだ、ということマヒアはよく知っていた。そこでマヒアはカウリ (kauri: ゴムの木) で木製の喇叭 (pūtara) を作り、それを作り終わると、息子であるオロケワ (Orokewa) とともに家をあとにした。家を出て、アワルア<sup>12)</sup>、マタルラアへと向かい、さらにオタウアへとまっすぐに進み、カタの丘の頂に登った。それから、二人は丘に留まり、そこでマヒアは木製の喇叭を一吹きした。オロケワはマヒアから少し離れた処に潜み、ヒヒオトテを待ち構えた。

ヒヒオトテはマヒアの木製の喇叭の音を聞くと、すぐさまオカの結び付けられたマントをひつつかんだ。そして獲物が木製の喇叭を吹いていることに大喜びして、マヒアの許へと一直線に向かった。ヒヒオトテが近づいて来るのを見て、マヒアは「ようこそ」と声をかけた。

ヒヒオトテはマヒアの許に足早に近づいて行った。鼻先まで近づき、挨拶を交わそうと鼻を突き出した。マヒアはマントから抜かれたヒヒオトテのオカの切っ先を見てとると、木製の喇叭でヒヒオトテを殴りつけた。ところが、ヒヒオトテがこの一撃をかわしたため、喇叭は空を切り、かくして、二人はお互い押し合い押し合い相争った。

その時、オロケワが踊り出て、ヒヒオトテを地面に投げつけた。「ヒヒオトテを倒すのに二人の男が必要だった」とヒヒオトテは倒れながら、そう漏らした。

マヒアとオロケワはヒヒオトテを死ぬまで打ちつけた。こうしてヒヒオトテは死んだ。ヒヒオトテが死ぬと、ふたたび人びとは平穏を取り戻し、幸せに暮らした。

これにてヒヒオトテの話はおしまい。

## ロナ、月の女性

### Ko Rona

一八五八年頃

これはロナ (Rona) の話。ある月夜の晩、ロナはひょうたんの籠を手を持ち、水を汲みに行った。水汲みに行く途中、月が雲間に隠れた。そのため、小道を歩くことがひどく難しくなった。たちまちロナは茂みに足を取られてつまづいた。

ロナはこれに腹を立て、月を呪い始めた。「あの月の煮られ頭め (pokōhua)<sup>13)</sup>、姿も見せず、明かりもよこさない！」

ロナのこの言葉に月は腹を立て、大地に降りて来てロナをつかみあげた。ロナは小川の傍にあった大木をつかんだが、木は根こそぎ大地から引き抜かれてしまった。ロナは木とひょうたんの籠と一緒に月に連れ去られてしまった。

村の人びとはロナの帰りを待ったが、とうとうしびれを切らして、ロナを探しに行くことにした。「ロナ、ロナ、どこにいるんだ？」と人びとはロナに呼びかけて、そこかしこ草の根を分けて探した。

ロナは月から下に向かって声をかけた。「わたしはここよ。月と星々の間に登っているの！」<sup>14)</sup>

### 弟の妻を欲しがった男

#### Ko Waihuka rāua ko Tuteamoamo

一八五四年 (収録はおそらくカウィア地方)

むかしむかし、二人の男の子が生まれた。兄弟二人っきりで、母親も親族も故郷もなかった。弟の名はワイフカ (Waihuka)、兄の名はツ・テ・アモアモ (Tu-te-amoamo) であった。

弟にはヒネ・イ・テ・カカラ (Hine-i-te-kakara) という妻がいた。このヒネ・イ・テ・カカラは大層美しい女であった。そのため兄は弟を妬み、「弟にはあの美しい妻がいる。どうしたらあの女を手に入れることができるだろうか」と思案を巡らした。

しばらく兄は弟の妻を手に入れるための手立をあれこれ思案し、とうとう弟を始末するうまい策略を思いついた。そして、そのためには弟と海に釣りに行く必要があると考えた。

「さあ、魚を捕りに行こう」、そう言って、ツ・テ・アモアモはワイフカを誘った。

ワイフカはツ・テ・アモアモに誘われるまま、二人は海に漕ぎ出して行った。しばらくすると、海岸も見えなくなり、もはや本土も見えなくなるほど遠い沖合にまでやって来た。錨を投げ下ろすと、ワイフカはカヌーの舳先に、ツ・テ・アモアモは艫に陣取った。糸に釣り針をつがえ、餌をつけて海に投げ入れた。長い間、釣りに熱中し、二人ともたくさんの釣果を上げた。釣り上げた魚はハプクであった。釣りをつづけてるうちに、カヌーは釣った魚で一杯になった。そのため、二人は浜に戻ることにした。

さて、ツ・テ・アモアモはワイフカの妻をわがものにするため、邪魔な弟を殺したいという願望をいまだに抱きつづけていた。「錨を引き上げろ」とツ・テ・アモアモはワイフカに呼びかけた。

「どうにもこうにも重過ぎて、できないよ」とワイフカは答えた。

「気にせず引き上げろ」とツ・テ・アモアモはさらに言った。

「どうにもこうにもできないよ」とふたたびワイフカは答えた。

ワイフカはロープをつかみ、錨を引き上げようとしたが、錨は海底にしっかりと食い込んでびくともしなかった。「僕には無理だよ。兄さんが来て引き上げてよ」。

「そんなことするもんか。おまえが潜って取って来い」とツ・テ・アモアモは言った。

「おまえこそ潜れ」とワイフカは言い返した。

するとふたたびツ・テ・アモアモが言った。「いいや、おまえが潜れ」

こうして、二人は互いにどちらが海に潜るか言い争った。しかし、結局ツ・テ・アモアモがこの言い争いに勝ち、ワイフカは錨を探すために海に跳び込んだ。ワイフカが海に潜り、その姿が波間に消えると、すぐさまツ・テ・アモアモはワイフカとカヌーを繋いでいたロープを切り、カヌーの帆を上げた。

ワイフカが波間から顔を出した時には、カヌーはすでに遠く離れていた。「カヌーを戻してくれ!」とワイフカは叫んだ。

「ほら、おまえの服だ。これをおまえのカヌーにすればいいさ」そう言って、ツ・テ・アモアモはワイフカの服をつかむと、海に放り投げた。

「ねえ、カヌーを戻してよう」もう一度ワイフカは叫んだ。

「ほら、おまえのカヌーだ」ツ・テ・アモアモはカヌーの敷物をつかんで海に放り投げた。さらにツ・テ・アモアモは釣り針、梁、甲板、かい、あかくみなどを、ワイフカのカヌーだと言って、次々に海に放り投げた。

そこで、ワイフカは波間を漂いながら助かる算段を思い巡らし、神々に祈った。それから、あほう鳥に呼びかけた。「あほう鳥よ、わたしを陸に運んでおくれ」。

しかし、あほう鳥は気にも留めなかった。

「背黒かもめよ、わたしを陸に運んでくれ」。

しかし、背黒かもめは気にも留めなかった。

「鶉よ、わたしを陸に運んでくれ」。

しかし、鶉は気にも留めなかった。

こうしてワイフカは鳥という鳥に呼びかけたが、その呼びかけに応えようとする鳥はいなかった。ついでワイフカは海の魚たちに呼びかけたが、魚たちはワイフカの呼びかけを聞こうとはしなかった。しかし唯一、鯨だけがワイフカの呼びかけに応えた。鯨はワイフカの祖霊で、チニラウ (Tinirau) のペットであった。チニラウは全世界の王であった<sup>15)</sup>。

「鯨よ、わたしを陸に運んでくれ」とワイフカが呼びかけると鯨はそれを聞き入れ、ワイフカの側に寄って来た。鯨はワイフカを背に乗せ、海岸まで運んで行った。

一方、ツ・テ・アモアモは海岸に戻り着いていた。ワイフカの妻が海岸に降りると、そこに夫の姿はなかった。「あなたの弟はどこですか」と妻は尋ねた。「弟はもう一つのカヌーにいる」とツ・テ・アモアモは答えた。

妻は夫が亡くなったと思い、悲しみに暮れ、家に戻ると夫を偲び、涙を流した。

夕刻になると、ツ・テ・アモアモが家にやって来た。「ヒネ・イ・テ・カカラ、戸を開けておくれ」とツ・テ・アモアモはヒネ・イ・テ・カカラに呼びかけた。

「まずはあなたの弟のために哭泣の礼を終らせて下さい。時間はたっぷりあります、ツ・テ・アモアモ!」とヒネ・イ・テ・カカラは答えた。

そうしたやり取りをしている間、ヒネ・イ・テ・カカラは家の中で穴を掘っていた。穴は胸の深さほどで、ヒネ・イ・テ・カカラはその穴の中にいた。

「ヒネ・イ・テ・カカラ、戸を開けておくれ!」しばらくして、ふたたびツ・テ・アモア

モはヒネ・イ・テ・カカラに大声で呼びかけた。

「まずは、あなたの弟のために哭泣の礼を終らせて下さい。時間はたっぷりあります、ツ・テ・アモアモ！」とヒネ・イ・テ・カカラは答えた。

いまや穴は首の深さにまで達していた。ヒネ・イ・テ・カカラはその穴の中にいた。

しばらくして、ツ・テ・アモアモが呼びかけると、今度は何の返事も返ってこなかった。そこでツ・テ・アモアモが戸を打ち壊すと、もはやそこにはヒネ・イ・テ・カカラの姿はなかった。

ヒネ・イ・テ・カカラは家から逃れ出ると、海岸に沿って夫の姿を探した。ヒネ・イ・テ・カカラは夫が死んだものと思い、亡骸や遺骨を探しまわった。

ほどなく、ヒネ・イ・テ・カカラはあほう鳥に出会わした。

「向こうで何か腐ったものを見なかった？」とヒネ・イ・テ・カカラはあほう鳥に呼びかけた。「いや、何も」とあほう鳥は答えた。背黒かもめや鵜などあらゆる鳥、すべての魚に、「向こうで何か腐った塊を見なかった？」(Kāhore he popopo rākau e tātaka mainā?<sup>16)</sup>) と呼びかけたが、「いや、何も」鳥たちや魚たちの答えはみんな同じであった。

それから、ヒネ・イ・テ・カカラは鯨に会い、また先ほどと同じ質問を繰り返した。「海岸に、ほらそこにいるよ」と鯨は答えた。

鯨が教えてくれた場所に行くと、はたしてそこには夫がいた。ヒネ・イ・テ・カカラは夫の首筋に抱きつき、二人は泣き合った。

ひとしきり泣いた後、「さあ、家に帰ろう」とワイフカはヒネ・イ・テ・カカラに言った。二人は家路につき、家に着くとふたたび一緒に声をおし殺して泣いた。

それから、ワイフカは髪を梳り、髪を整え、羽根で飾りつけ、キウィ (kiwi) の羽根のマントを着て、タイアハ (taiaha: 長い棍棒) をつかむと、家の中でタイアハを抜き、振り回した。「わが武器は見事であろう、どうだ」とワイフカはタイアハを振りかざして、ヒネ・イ・テ・カカラに問いかけた。「ええ、見事です」とヒネ・イ・テ・カカラは答えた。

ワイフカはタイアハを置き、つづいてメレ (mere: 石の棍棒) を手にすると、「今度はどうだ」と問いかけた。「その武器は使わないで」とヒネ・イ・テ・カカラは答えた。

そしてまた、コチアテ (kotiate: 短い棍棒) を持って、「見ておくれ、今度はどうだ」と問いかけた。「それはよくありません」とヒネ・イ・テ・カカラは答えた。

「これで、すっかり武具で身を固めることができたかな？」ワイフカはパラオーア (parāoa: 鯨の骨の棍棒)、フアタ (huata: 槍) などさまざまな武器を持って、ヒネ・イ・テ・カカラに問いかけた。「いいえ、きっとあなたは殺されてしまいます」とヒネ・イ・テ・カカラは答えた。

そこでワイフカはふたたびタイアハを手にした。そして地に届かんばかりに、タイアハを振り回した。「まあ、なんと巧みに武器を使いこなすのでしょうか！ あなたの兄がやって来た時、そのようにすれば、きっと倒せるでしょう」とヒネ・イ・テ・カカラは言った。

日が暮れ、ツ・テ・アモアモがやって来た。「ヒネ・イ・テ・カカラ、戸を開けてくれ！」。「さあどうぞ、ツ・テ・アモアモ！」ツ・テ・アモアモが家に入ったその時、ワイフカはツ・テ・アモアモの前に踊り出て、肩口から頭を横殴りにした。こうしてツ・テ・アモアモは倒された。

これでおしまい。

## 二匹のタニファの話<sup>17)</sup>

### Ko Ureia rāua ko Haumia

語り手：ハウラキのガチ・タマテラ族テ・アフエ 一八四三年

ウレイア (Ureia) というタニファがハウラキに棲んでいた。マヌカウにはハウミア (Haumia) というタニファが棲んでいた。さて、ハウミアがハウラキにあるウレイアの住まいを訪ねた。「何しにやって来たんだ？ おまえの家には食べ物がないのか？」とウレイアは尋ねた。

「いやいや、家には食べ物はあるさ、そして宝物も」とハウミアは答えた。

「家にはどんな宝物があるんだ？」。

「フーイア (hūia) や白サギ (kōtuko)、ラウカワ (raukawa) の木やスペアグラス (taramea)、コーブラ (kōpura)、マネフ (manehu)、そしてコフラの木 (tāwhiri) などさ<sup>18)</sup>とハウミアは言った。

「本当に？ では、その素晴らしい棲み処を見に行こう」。

「いいとも、わが家の素晴らしさを見に来てくれ」。

こうして二匹のタニファはウレイアの家をあとにしたが、ハウミアは踵を返すと、ウレイアのあばら家の敷居をまたぎ、その戸口を盗んだ。これを見たウレイアは言った。「タニファを宿なしにしたのはハウミアだ<sup>19)</sup>」。

さて、しばらくしてウレイアはプボッガにやって来た。マヌカウ族の人びとは麻織りの家<sup>20)</sup>を作り、水面に浮かべた。ウレイアがこの家を見つけて泳いでやって来た。そして、家の中にウレイアが入ると、マヌカウ族の人びとはこの家をひっぱり岸に上げた。

これが、ガチ・マル族が戦争を起こした発端であった。

## テ・カナワと妖精

### Te Kitenga a Te Kanawa i te Patupaiarehe

語り手：ワイカトのテ・フェロフェロ 一八五三年

妖精に出会ったテ・カナワ (Te Kanawa) という男がいた。テ・カナワが妖精に出会ったのは、ワイカトのプケモレ山であった。テ・カナワはそこに犬を連れてキィウィを狩りに行った。夕暮れが迫り、テ・カナワと従者たちは夜営をするため火をおこした。日が落ちると、テ・カナワたちは大木の下で横になった。火を前にし、木の根を間に挟んで、みんなは横になった。そして、このような場所を見つけることができたことを大いに喜んだ。

日が暮れるとすぐに人の声のような物音が聞こえてきた。その声は男の声、女の声、子ども声が入り混じったもので、あたかも旅の一団がそこにいるかのようであった。ほどなく、この声の主が妖精であることが分かった。テ・カナワたちはひどく脅えた。暗闇の山の中で、

どこに助けを求めることができよう。

妖精たちはテ・カナワたちの方にじりじりとにじり寄り、火のすぐ側にまでやって来た。テ・カナワたちは恐れた。妖精たちは輪になって取り囲み、素晴らしい容姿をしたテ・カナワをじっと眺めた。妖精たちはテ・カナワをじろじろと見つめながら、従者たちが寝ている木の根元に踊り出た。男たちの恐れ慄くありさまを尻目に、妖精たちはテ・カナワをじっと見つめつづけた。妖精たちは火が燃え上がると少し引き下がり、火の勢いが弱まるとまた近づいて来た。妖精たちは歌った。

おまえたちは、ほらここ、チランギに登っている、  
アチ・プヒの人びとに……  
輪になれ、戻れ！<sup>21)</sup>

その時、テ・カナワは首にかけたグリーンストーンの留め具のついたペンダントのことに思いをめぐらせていた。テ・カナワは首からペンダントを外した。恐怖に慄き、その恐怖のあまり、今にも死にそうであった。妖精たちは従者たちに襲いかかろうとはしなかった。ただじっと間近で従者たちを眺めていた。テ・カナワは首につけていたペンダントの留め具と鮫の歯の耳飾りを手に取り、それらを広げて、周りを取り囲む妖精たちに見せた。それから、地面に棒を立て、ペンダントと耳飾りを吊した。

すぐさま妖精たちは歌うのを止め、耳飾りの形<sup>22)</sup>を手に取り、次々にそれを仲間の妖精たちに手渡していった。すると、たちまち妖精たちは消え失せ、そこには妖精の影も形もなくなっていた。

妖精たちによって、宝物であるペンダントと耳飾りの姿形は持ち去られたが、ペンダントと耳飾りそのものはあとに残った。テ・カナワはふたたびペンダントと耳飾りを手にした。テ・カナワが妖精たちによく見えるように、ペンダントと耳飾りを棒に吊したため、妖精たちの心は満たされたのだ。夜が明けると、すぐにテ・カナワは山を降り、二度とこの地で狩をすることはなかった。

この地に棲む生き物の中で妖精たちが最も数が多く、セミの数ほど多くの妖精たちがいた。その外見は人に似ていて、一見、白人のように見えた。妖精たちは、マオリ人たちと全く似ておらず、まるで別のものであった。

テ・カナワはこの国に白人たちがやって来る前に死んだ。

## チタブの仕返し

### Ko Pito raua Titapu

語り手：ハウケ湾のガチ・カフングヌ族 一八六二年

これはピト (Pito) とその義弟であるチタブ (Titapu) の話である。この兄弟たちはめいめいそれぞれの家を建てた。チタブの家が仕上がった時、ピトは言った。「おまえの家ができあがっても、おれの家ができあがるまで、竣工式は待っていてくれ。おれの家儀式と

一緒にしようじゃないか」。

しかし、チタブはピトの言葉を気にも留めずに、さっさと自分の家の竣工式を済ませてしまった。そのことを知ったピトはチタブを殺し、その亡骸を壁に塗り込んだ。夕刻、チタブの姿はどこにもなかった。チタブの妻トロトロクラ (Torotorokura) は兄であるピトに尋ねた。「あなたの義弟はどこにいるんですか?」「知らない。会わなかった」とピトは答えた。

そこでトロトロクラは夫の血を求めて儀式を行った<sup>23)</sup>。すると血が浮き上がった。儀式が済むと一匹のアオバエがブンブンと羽音を立てながらやって来た。トロトロクラはハエの後を追うと、はたして、そこには夫の亡骸があった。

「あなたは夫と一緒にいました、とわたしが言ったことを、はっきりと否定しました」とトロトロクラはピトに詰め寄った。

その晩、トロトロクラが眠りに就くと、夢の中に夫であるチタブの霊が現れた。夢の中で、チタブの霊は鳥の姿、白サギの姿となって、ピトと戦うためにこちらに向かって来た。夢から覚めると、トロトロクラはピトに言った。「あなたの義弟があなたと戦うためにやって来る夢を見ました」。

「奴は完全に死んでいる。わたしと戦うために戻って来るんだと? そんなことはない、霊は戦いに戻ってなど来やしない」。

「いいえ、チタブはあなたと戦うためにやって来ます」

翌朝、二人が起きると、鳥の姿をした死者の霊が屋根の上に止まっていた。トロトロクラは鳥を見上げた。鳥は純白で、家の破風板の上に止まっていた。「ピト、あなたの義弟よ!」とトロトロクラは叫んだ。ピトはチタブを見ると、槍をむんずとつかんだ。鳥はマラエの上に降り立った。ピトは槍を持ち、前に進み出た。そして、間近から槍を投げつけたが、鳥はくちばしをかがめて、槍をかわした。それから、鳥はピトの上に立ち、くちばしで致命的な一撃を加えた。この一撃により、鳥のくちばしはピトの額に突き刺さった。鳥の強烈な一撃を受け、ピトは地面に倒れた。手を休めず鳥はピトを突き刺しつづけた。こうして、とうとうピトは死んでしまった。

実はピトはツヌイ・オ・テ・イカ<sup>24)</sup>であった。かつて、マウリの時代には、ツヌイ・オ・テ・イカは白昼に<sup>ほっこ</sup>跋扈する人食いの神であった。これでこの話はおしまい。

## 女とガララ (第一ヴァージョン)

### Ko Te Kakauoterangi

語り手：ハウケ湾のガチ・カフングヌ族 一八六二年

むかし、女がタラタ (tarata) の木立ち<sup>25)</sup>の許に出掛けた。木立ちに着くと、女は一本の木に登った。この木の根元にはガララ (ngarara : 大トカゲ) の巣があった。ガララは巣穴からはい出ると、女をひつつかみ、妻にしようとして連れ去った。こうして、女はガララに連れ去られ、長い間一緒に暮らした。

ある日のこと、女は喉の渇きをおぼえた。「水を飲みに行ってもいいかしら?」と女はガ

ララに尋ねた。

ガララはロープを編むと女の髪に結び付け、「一つ目の池はわたしが身体を洗い、髪を梳る池だ。さらに行くくと沐浴して糞を洗い流す池がある。そして、さらに行くくと飲み水がある」<sup>26)</sup>と教えた。

女はガララの棲み処を出て、水飲み場に行き、水を飲んだ。喉の渇きを癒すと、女は髪に結びつけられたロープをほどき、木に結びつけ直すと、故郷へと帰って行った。

ガララが力いっぱい引いてもロープはピクリともしなかった。そこでガララがロープをたどると、ロープが木にしっかりと結びつけられていた。

「ガララが妻にするためにわたしを連れ去った」。女は村に着くと親や兄弟たちにそう言った。

「ガララを殺せっこない」と女の親や兄弟たち<sup>27)</sup>は言った。

「いいえ、できます。でも、そのためには家を建てなくちゃなりません」。

ほどなく、家はできあがった。この家には、ガララの四肢と尻尾のために特別にしつらえた部屋があり、また母屋はその巨大な腹に合うようにしつらえられていた。それから、兄弟たちは穴掘り棒 (kō) を作り始め、それがすっかりできあがると、女はガララを迎えに行った。

「兄弟たちが訪ねて来るように言っていました」女はガララの棲み処に戻ると、そうガララに告げた。

ガララは女の言葉を聞き入れ、女の親元へと向かった。村が近づくにつれ、「ようこそ、ようこそ」という声が聞こえてきた。それからほどなく、女とガララはあの家にたどり着いた。ガララの片方のわき腹がすっぽりと家の内側に納まった。しばらくすると、家の外から男たちの叫び声と足を踏み鳴らす音が聞こえてきた。「何の音だ？」とガララは女に尋ねた。

「別に……、あれは兄弟たちが……、そうそう、兄弟たちがあなたのためにハカ (haka) を踊っているのよ」。

「そうか、そうか。踊り……、テ・カカウ・オ・テ・ランギのための踊りか！」。

テ・カカウ・オ・テ・ランギ (Te Kakau-o-te-rangi) とは、このガララの名前であった。

兄弟たちはガララに火をつけた。ガララは激しくもがいたが、燃え尽き、さらに兄弟たちに穴掘り棒で突き刺され、とうとう死んでしまった。ガララの霊は一本の木へと飛び去り、歌った。これがその歌<sup>28)</sup>。

テ・カカウ・オ・テ・ランギは死んだ……今はどこにいる？

ひょっとしたら、ばらばらにされて、多くかけらになった、たくさんのかげらになった、フベケチアに、ネイ、ネイ、ネイ、ナ、イア、ケ！

このガララの鱗は四方八方に逃げ去った。かつて、この鱗はモトゥ・オ・クラとイナンガタヒとプケチチリに住んでいた<sup>29)</sup>。

これでこの話はおしまい。

## 女とガララ（第二ヴァージョン）

### Ko Te Mataoterangi

語り手：東海岸のガチ・ポロウ族モヒ・ルアタブ 一八七六年

また別の話では、むかしヒネ・テ・ピピリ (Hine-te-pipiri) とヒネ・テ・カカラ (Hine-te-kakara) という二人の女がいた。ある日のこと、二人がタラタの木の上から下を見下ろすと、ガララが木を登ってくるのが見えた。それを見て、一人は逃げたが、一人は捕まり、ガララの棲み処へと連れ去られてしまった。

ガララから逃げのびた女は村へ戻ると、人びとに告げた。「友達がガララに捕まってしまった」。

「どんなガララだ？」。

「テ・マタ・オ・テ・ランギ (Te Mata-o-te-rangi) です。その長さは一〇尋<sup>ひろ</sup>にも及びません」<sup>30)</sup>。

一方、ガララに連れ去られた女は妻となり、ガララと一緒に暮らしていた。しかし、長いこと一緒に暮らすうちに、女は兄弟たちに会いたいと思うようになった。「どうか兄弟の許に行かせて下さい」。

「いいとも、兄弟たちに会って来い」。そう言って、ガララは女の願いを聞き入れた。

こうして、女はガララの棲み処をあとにした。村に着き、挨拶を交わすと、両親と兄弟たちの傍で涙を流した。そして、ひとしきり泣いた後、女は両親に告げた。

「わたしはお父様方をあの人の処に連れて行くためにやってきました」。

「よろしい、だが、おまえの夫の方をここに連れて来い」と女の親兄弟たちは言った。

「では、わたしは戻ります。お父様たちは、必ず家の表と裏に薪を積み上げておいて下さい」と女は言った。

その後、女はガララの許へ戻った。「両親の許に行ってきたか？」とガララは女に尋ねた。

「ええ、行ってきました」。

「何か言っていたか？」。

「わたしたちに訪ねて来るように、とみんなが話していました」。

ガララはこの言葉に大喜びした。そして、女とガララは女の親元へと向かった。村が近くにつれ「ようこそ、魚！ ようこそ、ガララ！」という呼び声が聞こえてきた。

「ひょっとすると、義兄弟たちはこのおれと一戦交えたいというのか、つまり、魚<sup>31)</sup>という言葉と？」とガララは言った。

ガララは家に入った。ガララの長さは一〇尋<sup>ひろ</sup>、家の長さも一〇尋<sup>ひろ</sup>。手足を伸ばした長さと同度同じであった。

その後、義兄弟たちはガララに食べ物を運んだ。籠一杯の食べ物を、ガララはペロリと平らげた。ガララにとって、それはほんの一食分にしかすぎなかった。お腹が一杯になり、眠りに就くと、義兄弟たちの一人が叫んだ。「ガララが眠っているぞ！」。

すると、すぐさま義兄弟たちは家に火をかけた。ガララは熱がって、火を消そうとした。口で消そうとしたが、無駄骨……、火は消えなかった。ついで、尾で火を消そうとしたが、骨折り損……、依然として火は消えなかった。こうして、とうとうガララは焼け死んでしま

った。

## 少年と豆の莢のカヌー

### Ko Tautiniawhitia

語り手：東海岸のガチ・ポロウ族モヒ・ルアタブ 一八七六年

これは、ある男とその妻の話。二人は一緒に暮らしていた。二人はともに日々を重ね、ある日のこと妻は空腹をおぼえ、鳥が欲しくてたまらなくなった。「鳥が欲しくてたまらないの」と妻は夫にせがんだ。

きっと鳥を欲しがった妻のお腹には赤ん坊がいたのだろう。

夫は鳥を捕まえに狩に出掛けた。なんとまあ驚いたことに（カーオレ：kāore）！ はたして夫は一羽のフーイア（hūia）と一羽のコーツク（kōtuku：白サギ）、つごう二羽の鳥を捕まえて戻った。妻はこの二羽の鳥を食べずにペットとして飼った。

さて、いよいよ妻のお腹が大きくなると、夫はさっさと実家に帰ってしまった。妻は家族とともにその地に留まった。やがて時が満ちて、妻は一人の男の子を産んだ。妻は子どもを大事に育てた。子どもはすくすくと大きくなり、体軀堂々たる少年になった。そして、帆船を走らせたり、コマを回したり、凧を揚げたり、小鳥を捕まえたりして遊ぶようになった。「一番ゲームが上手いのはあの父なし子だ」と父親のいる他の子どもたちは噂し合った。

少年はこれを聞いて、自分に父親がいないことをひどく恥ずかしく思った。「母さん、母さん、父さんはどこにいるの？」と少年は泣きながら母に駆け寄った。

「父さんはここにはいないのよ。父さんは遠くにいるのよ。遠い、遠い処に。日の昇る方を見てごらん、そこが父さんが住んでいる処よ」。

母の言葉を聞いた少年は森に分け入り、一本のレワレワ（rewarewa：スイカズラ）の木の莢を持ち帰った。そして、それを川に浮かべ、沈むかどうかを試した。すると、莢はひっくり返らなかった。「母さん、僕は父さんの処に行くよ。ここにいる気はないんだ……ここにいるなんて、大恥さ！」と少年は家に帰ると母に言った。

「坊や、道中の食べ物ができあがるまで待ちなさい」と母は言った。

「食べるもんか。槍の突きはかわせても、口から出た言葉はかわせない」<sup>32)</sup>と少年は言った。

そう言い残すと、少年はレワレワの莢<sup>33)</sup>のカヌーのある場所に向かった。カヌーを水辺にぐいっと押し出すと、そのままその莢のカヌーに乗って川に漕ぎ出した。母は涙を流し、少年もまた涙を流した。少年は母に別れを告げ、そしてまた母も少年に別れを告げた。それからしばらくして、少年は海に出た。海岸で母は呪歌を吟じた。これがその呪歌<sup>34)</sup>。

カヌーは誰のもの？ カヌーは誰のもの？

カヌーはあたしのもの……フル・マ・アンギアンギ（Huru-ma-angiangi）のもの、  
タラ・マ・アンギアンギ（Tara-ma-angiangi）のもの。

行く手を阻むのは水の音。

カヌーよ疾く滑れ、嵐よ止まれ！

地を越え、空を越え、魔法で切り抜けろ、  
早々に陸に着け、早々に海岸に着け、  
おまえの旅の目的地にたどり着け！

これで母の呪歌はおしまい。

少年の名前はタウチニ・アフィチア (Tautini-awhitia)、父はポロウ・アノアノ (Porou-anoano)、母はフル・マ・アングィアングィ (Huru-ma-angiangi) であった。

少年は旅をつづけ、とうとう父の住む場所へとたどり着いた。少年はカヌーを砂に埋めた。すると、村の子どもたちがみな口々に「あいつは僕の奴隷だ！」と言って、少年の方に駆け寄って来た。

少年は子どもたちに連れられ、村にたどり着いた。人びとは老いも若きも少年を求めて言い争った。結局、少年は小さな男の子のものとなった。この男の子は少年の腹違いの弟だった。「父さん、見て、僕の奴隷だよ！」男の子は叫びながら、父親の許に駆けて行った。

「こいつを料理小屋に連れて行け！」<sup>35)</sup>父親は奴隷を手に入れたことに大喜びし、男の子に命じた。

次の日、村の子どもたちは鳥を捕まえに、帆船を走らせに、子どもたちがするような、その他全ての遊び……あまり数が多くて数えられないが、それらの遊びをしに出掛けて行った。そんな中、少年は森の中に入り、二羽の鳥を捕まえた。この鳥たちはまだ少年が母親のお腹にいる時に母親が欲しがったあの鳥たちだった。

少年はフーイアに言った。「おまえは、火が燃えていないよ……暗い、暗い、暗い！ と  
言わなくちゃいけない」。

さらに、白サギに言った。「おまえは、火が燃えていないよ……明るい！ と  
言わなくちゃいけない」。

少年は二羽の鳥にそう教えると料理小屋に戻った。

夜になり、少年は家の中を覗いた。しばらくすると、家の中の男たちのうち、あるものは眠りに就き、またあるものはいびきをかいていた。そこで少年は料理小屋に戻ると、鳥たちを家の前まで運んだ。それから、そっと戸を開け、家の中に入ると、鳥たちを下ろし、灰の中にクマヤナギの鳥籠を置いた。

突然、フーイアが鳴いた。「火が燃えていないよ……暗い、暗い、暗い！」

男たちは仰天して、叫び声を上げ、鳥籠を持ち上げた。

その時、白サギが鳴いた。「火が燃えていないよ……明るい！」。

これに、男たちはみな跳びあがり、口々に驚きと感嘆の声を口にしては、この二羽の鳥を不思議そうに見つめた。その時、少年の父親が立ち上がり、二羽の鳥を見て言った。「この子はわたしの息子だ。この鳥たちはこの子の母親が欲しがった鳥なのだから」。

父親は少年を思い涙を流した。夜が明けると、少年を水場に連れて行き、首長<sup>36)</sup>の息子として欠かすことのできない儀式をすっかり済ませた。

これでこの話はおしまい。

## ちっちゃなチエケ、踊る泥棒

## Ko Tieketi raua ko Tiekerahi

語り手：東海岸のガチ・ポロウ族モヒ・ルアタブ 一八七六年

これは小さなチエケと大きなチエケの話。この二人のチエケの振る舞い、行動は全く違っていた。それはいつも変わらなかった。兄である大きなチエケはよく釣りに出掛けた。一方、弟である小さなチエケはよくクマラ (kumara: タロイモ) を盗んだ。

クマラの持ち主たちは横になり、小さなチエケを待ち伏せた。そして、小さなチエケがクマラの穴に入ると、入り口を塞ぎ、小さなチエケを捕まえた。持ち主たちは殺すべきだと言口々に言い合った。「ちょっと待ってよ、あなたたちのために踊りを踊るから、それまでは殺さないでよ」とチエケは言った。

「よし、よし」と持ち主たちはみんな肯いた。

小さなチエケは自分の名前を連呼しながらハカを踊り始めた。「みすぼらしいチエケ、みすぼらしいチエケ！ よく見てごらん！ 遠くに離れていくぞ！」<sup>37)</sup>。

持ち主たちはチエケの踊りに感嘆して、そのまま躍らせた。小さなチエケは踊りながら次第次第に遠ざかり、そして持ち主たちから十分に離れると、突然反転し、まんまと逃げ去ってしまった。こうして持ち主たちは小さなチエケを捕まえ損なった。

これでこの話はおしまい。

## 霊にとり憑かれたイフ・ラヒラヒ

## Ko Ihurahirahi

語り手：東海岸のガチ・ポロウ族モヒ・ルアタブ 一八七六年

また別の話がある。

むかし、一人の少年がいた。両親に言われるまま、少年は水を汲みに出掛けた。水場に着いた少年は、ひょうたんを水の中に入れたが、うっかりひょうたんを手から滑らしてしまった。少年はひょうたんをつかもうとしたが、水の中に沈み、水をしこたま飲んでしまった。

両親は少年を探しに出掛けた。しばらくして、クモのように水面に浮かぶ少年を見つけた。少年はすでに死んでいた。

両親は少年の亡骸を岸まで引き上げ、その後、村まで運んで行った。両親は少年のことを偲び涙した。哭泣の礼が済み、亡骸を埋葬した後、少年の霊は身体から抜け出し、生者を狂わせる世界へとたどり着いた。少年の霊はイフ・ラヒラヒ (Ihu-rahirahi) を霊媒として選び、とり憑いた。イフ・ラヒラヒはそこからトコマルへと向かい、つぎにオランギクバにある要塞へと向かった。そして、そこでしばらく暮らした後、海に身を投げた。要塞は切り立った崖の上にあったが、この狂人は躊躇ちゆうちよすることなくまっしぐらに要塞を跳び越えた。要塞は全てが堅い大地で覆われているし、イフ・ラヒラヒは水に沈まないと、霊がイフ・ラヒラヒに告げたからだった。

人びとは海岸でイフ・ラヒラヒが跳び込むのを見たが、すぐにその姿は人びとの視界から

消え去った。さてまゝ（カーオレ）！ イフ・ラヒラヒは海に沈み、霊<sup>38)</sup>の導きに従ってハプクが餌を貪り食う場所へとたどり着いた。霊の導きに従い、その場所でイフ・ラヒラヒはたくさんの魚たちと一緒に泳いだ。またそれから、霊の導きに従って、イフ・ラヒラヒは海面に浮き上がった。そして、海岸から山々や峰や崖などを見まわし、その場所がどこにあるかを知った。

テ・ポロポロ（Te Poroporo）の海岸にたどり着いたイフ・ラヒラヒは、人びとに自らの身の上話を語って聞かせた。その話を聞いて人びとは大喜びした。翌朝、人びとはカヌーに乗り、海へと繰り出していった。そして、イフ・ラヒラヒが話してくれた例の場所に着くと、目印<sup>39)</sup>を確かめ、たくさんの魚を釣った。人びとのカヌーは釣った魚で一杯になった。人びとはこの場所をカプア・ランギ（Kapua-rangi:「天空の雲」）と名づけ、海岸に漕ぎ戻った。

人びとがテ・ポロポロに戻ると、大漁の知らせを聞いたテ・ハラタウ（Te Haratau）は、手に武器を携えて海へと漕ぎ出し、このカプア・ランギの暗礁へと向かった。ルアトナ（Ru-atona）もまたこれを聞いて、武器を手に、テ・ハラタウと戦うため、その後を追った。テ・ハラタウがカヌーの舳先<sup>へさき</sup>を向けると、ルアトナがカヌーを漕ぎながらこちらの方に向かって来るのが見えた。カヌーがぶつかり合い、二人は海の上で戦った。それから二人は陸に戻り、ふたたび戦った。

ルアトナはテ・ハラタウを殺した。「遺体に触れるな」とテ・ハラタウの仲間たちは口々に言った。

「夏にひとつまみの食べ物を無駄にするとは、何たることか？」<sup>40)</sup>とルアトナは言った。

ルアトナは戦いに勝ち、以後、カプア・ランギはルアトナのものとなった。

これでおしまい。

## 少年とハト

### Ko Pukoroauahi

語り手：東海岸のガチ・ポロウ族モヒ・ルアタブ 一八七六年

これはプロコ・アウアヒ（Pukoro-auahi）の話。プロコ・アウアヒは姉と義兄と一緒に暮らしていた。

プロコ・アウアヒと姉は家に残り、義兄は三人が食べる鳥を捕まえた。三人はこうして日々を過ごしていた。狩から戻ると、義兄は獲物を籠の中に入れ、その後、自分の好きなように鳥を選び分けた。籠はツタでしっかりと締められていた。鳥を料理し、家の中にいる義兄の処にできあがった料理を持って行くのはプロコ・アウアヒの日課だった。しかも、プロコ・アウアヒの座る席はいつも火の側にある丸太の上だった。火から立ち上る煙<sup>41)</sup>に目を痛めながらも、プロコ・アウアヒはその席に腰を下ろし、食事をとった。

プロコ・アウアヒが自分の食べ物を包む葉を手にするのは、いつも義兄と姉が食事を済ませた後だった。しかも与えられるのは、フクロウやタカやオウムやカラスなど、いつもやせ細ったみずぼらしい鳥だけであった。ただ、姉だけはプロコ・アウアヒのためにいつも太った鳥を一羽隠してくれていた。

さてある日のこと、プロコ・アウアヒが鳴き声を真似てステッチ・バード (kōtihe) やベル・バード (kōparakoko) をおびき出していると、小川で水を飲んでいる鳥たちに目にとまった。その鳥たちはハトだった。プロコ・アウアヒはニオイシュロラン (kāuka) や亜麻 (harakeke) の葉っぱを手に取り、それをコマ切れにして罌を作り、たくさんのハトを捕まえた。罌から外すやいなや、すぐさまハトたちは降りて来て、次々と罌にかかった。そのため、すぐにその場所は捕らえたハトたちで一杯になった。

「たくさんの鳥を殺した」。家に帰ったプロコ・アウアヒは、そう誇らしげに姉に自慢した。そして、鳥籠を作ってくれるよう、姉に頼んだ。

この言葉を聞いて、姉は大喜びした。そして、鳥籠の支度が整うと、二人は捕らえたハトを取りに、あの小川へと出掛けて行った。はたして、そこには捕らえたハトたちが山のようになり積み上げられていた。姉は喜びのあまり、

あるある、舌を出して、罌にかかっている！

と歌いながら踊った。

二人は積み上げられたハトを拾い集めた。小川で捕れたハトで一七〇もの籠が一杯になった。この小川はポウツル (Pouturu) という名であった。ハトたちが食べていたのは石だった。この小川の兩岸の石は赤く、そのためハトたちはこの石をミロ (miro: ニューゼaland松) の木の實と勘違いして、それを食べようと群がるように川原に降りて来たのだ。そして、この石を飲み込んだために、喉が渴いたハトたちは、水を飲みに小川に降りようとして、次々にプロコ・アウアヒの罌にかかったのだ。パラカウアエ (Parakauae) とテ・ファコアウ (Te Whakoau) がその地の名前だった<sup>42)</sup>。その地でハトたちを見つけたのはプロコ・アウアヒで、姉の名はプハウレロア (Puhauroa)、姉の夫の名はタラヌイ・オ・マテング (Taranui-o-matenga) と言った。

プロコ・アウアヒと姉は、背中に籠を背負いながらよろよろと家路についた。これらの出来事は朝のうちに起こった。夕刻になり、夫が森から戻ると、そこには鳥籠が山と積み上げられていた。夫はプロコ・アウアヒが盗みをはたらいたのだと思い、妻にひどく腹を立てた。そして、妻の言い分をいぶかしく思った夫は、とうとう妻に言った。「よかろう、それなら見に行こう」。

こうして、三人はあの小川へと向かった。はたして、小川で三人が見たのは、罌にかかった鳥たちだった。夫はプロコ・アウアヒがハトを盗んでいないことを知り、深く恥じ入った。

「義兄さんのためにハトを取っておきたいから、火をおこしてよ、それと姉さんのためにも」。家に帰ったプロコ・アウアヒは姉にそ言った。

そこで姉はハトを焼いた。そして、ハトがすっかり焼きあがると、姉は家の中にいる夫の許にハトを持って行った。「あなた、起きて！ ほら、あなたの分ができたわよ、起きて！」

ところが、夫はピクリともしなかった。姉は火の処に戻り、プロコ・アウアヒに言った。

「あの人ちっとも起きないのよ……まだ寝ているのよ」。

さてまあ、何としたことか (エイ: Ei) ! 姉はわなわなと身体を震わし、怒りを包み隠そうとした。「さあ、食べましょう」姉はプロコ・アウアヒに言った。

「まずは食べ物のタブ (tapu: 宗教的禁忌) をなくさなくっちゃ」とプロロ・アウア<sup>43)</sup>ヒは言った。

タラヌイ・ア・マテングの儀式、  
 プハウレロアの儀式、  
 わたしの儀式……プロロ・アウアヒの儀式、  
 儀式は完璧、儀式は上々、  
 食べ物の儀式、鳥の儀式。

これが食べ物からタブを取り除く呪歌であった。

この呪歌を唱えた後、二人は料理を食べた。食事を終わると、姉はふたたび夫の様子を見に家の中に入った。「あなた、起きて！」姉は夫に呼びかけた。

姉が側に寄って、夫の様子を見ると、夫が横たわる敷物の上には血が滴り落ちていた。姉は夫を起こそうと、夫の服を引っ張ると、案の定、夫は死んでいた。

「気の毒な人、あの人が死んでいる！」家から出た姉は、プロロ・アウアヒに向かって叫んだ。

「死因は？」。

「あの人は息が詰まっていたよ。あの人は死んだ、あのしわい屋のろくでなし！」

二人は家に火をかけて、亡骸を焼いた。夫の遺体は熱で破裂した。それから二人は鳥を全て料理し、ひょうたんに入れて貯蔵した。あの小川から捕れた鳥で七〇ものひょうたんが一杯になった。プロロ・アウアヒは姉を妻に娶り、一子をもうけ、タポラ・ロイロイ (Tapora-roiroi)<sup>44)</sup>と名づけた。

## 鷄の女、ハウメア

### Ko Houmea rāua ko Uta

語り手：東海岸のガチ・ポロウ族モヒ・ルアタブ 一八七六年

これはハウメア (Houmea) の話。

ハウメアは女泥棒であり、怪物であった。ハウメアの夫はウタ (Uta) と言った。ウタは自分と妻と二人の子どもたちのために漁に出た。二人の子どもはツタワケ (Tutawake) とニニ (Nini) という名前であった。ウタはたくさんの魚を捕って浜辺に漕ぎ戻った。そのため、ウタはハウメアが魚を取りに浜辺に降りて来るのを待った。ところが、ハウメアは来なかった。そこでウタは家に戻り、ハウメアに言った。「おまえが浜に駆け降りて来るのを長いこと待っていたが、おまえは来なかった」。

「それは子どもたちのせいよ……あの子たちはまったくきかん坊なんだから」。

ハウメアはウタが捕った魚を取りに浜辺へと降りた。ところが、ハウメアはカヌーの処に行くとき、魚を持ち帰るところか、魚をぐいとまる呑みして、ついには魚という魚を呑み込んでしまった。それから、さも野盗たちが魚を盗んだかのように見せかけるため、大小の足

跡をつけ、また辺りを踏みならし、さらにヒトモトススキ (upokotangata) とプーファー (pūwhā : ノゲシ) の束を砂浜の上で引きずり回した。

そうしてから、家に帰り、泣き叫びながら、ウタに言った。「魚の山が無くなった……盗人か、野盗に盗られてしまった」。

「どんな奴が盗んで行ったんだ？」ウタは言った。

「もしかすると、海の妖精 (ponaturi) たちかもしれない」

「そうか、ひょっとしたらそうかもしれないな」

ホウメアたちは床に就いた。朝になり、ウタはふたたび漁に出た。たくさんの魚を捕って、海岸に漕ぎ戻り、ふたたびホウメアが浜辺に降りて来るのを待った。ウタはホウメアが魚を取りに浜辺に駆け降りて来るのを空しく待った。ところが、ホウメアは降りて来なかった。そこでウタは家に戻り、ホウメアに言った。「おい、おまえ、どんなに待っても、おまえはまったく浜に駆け降りて来なかった、まったくな！」

ホウメアは起き上がると、ウタがカヌーを置いた処に向かった。そして、カヌーの処までやって来ると、また魚を丸呑みした。ホウメアが何をしているか、気になったウタは子どもたちにホウメアの様子を見に行かせた。そこで二人の子どもたちが見たのは、ホウメアが魚を丸呑みにしている姿だった。「父さん、父さん、カヌーの魚を丸呑みにしているのは、ホウメアだよ」。子どもたちは父の許に戻ると言った。

ホウメアは家に帰ると、泣き叫びながら、ウタに言った。「魚の山がなくなった……誰かが食べてしまった」。

「おい、おまえが話している誰かっていうのは誰だ？ 子どもたちが見たのは、おまえ、カヌーの魚を丸呑みにしていたのは、おまえだったんだな！」

ホウメアはひどく動揺した。わたしは食べ物を盗むような、あくどいことなどは決してしないと、言い張って、魚泥棒であることをひた隠し、自分に向けられた疑いを否定しようとした。しかし、心の中では、「たっぷり、たっぷりと、お仕置きしてやるぞ」と子どもたちへの仕返しを算段していた。

翌朝、三度ウタは漁に出た。ウタがカヌーを海に浮かべると、ホウメアは息子の一人に向かって言った。「坊や、みんなのために水を汲んで来ておくれ。喉がカラカラなんだよ」。

そして、ウタが漁に出掛けると、ホウメアは残ったもう一人の息子に向かって言った。

「坊や、こっちにおいで、頭を洗わせておくれ」<sup>45)</sup>

子どもがホウメアの許にやって来ると、ホウメアは息子の頭を洗い、胃の中にぐいっと呑み込んだ。もう一人の息子が水場から戻ると、また同じようにぐいっと呑み込んだ。こうして二人の息子たちは、ホウメアの胃の中にすっぽりと収まった。

ウタはカヌーを浜に上げ、家に戻ると、ホウメアが泣きながらうんうんと苦しげに唸っていた。ホウメアの唇にはニクバエが群がっていた。「おいおい、おまえは病気だ！」とウタは言った。

「ええ、ええ、そうよ」。

「おまえを蝕んでいる霊はどこだ？」。

「胃の中よ、お腹の中よ」。

「息子たちはどこにいる？」とウタは言った。

「ここにはいないわ。朝から出掛けていて、どこにいるか分からないわ」。  
そこでウタはハウメアの唇を見て、呪文を唱えた。

ぶっ叩け、どっか行っちまえ、  
鵜に餌を吐かせろ！

喉に詰まっているものを持ち上げろ、喉に詰まっているものを探し出せ、  
それこそツタワケを通せん坊しているものさ。

これがその呪文であった。

するとすぐさま、ハウメアが呑み込んだ二人の息子たちがハウメアから出て来た。ツタワケはタイアハ (taiaha: 長い棍棒) を手に、ニニはフアタ (huata: 槍) を持っていた。

これはウタの話。泥棒であり、自分の子どもたちを殺した女の話である。ウタとその子どもたちは、妻に生きながら呑み込まれるのではないかという不安を募らせ、妻をひどく恐れていた。ウタは息子たちに言った。「おまえたち、わたしの言うことをよくお聞き。たとえ、わたしが水を汲みに行くように命じても、水を汲みに行かないように。たとえ、そのことでわたしが腹を立てても、水を汲みに行かないように。わたしが鞭で脅そうとも、水を汲みに行かないように。たとえ、わたしがおまえたちをひどく怖がらせるようなことをしても、決して水を汲みに行ってはいけない」。

翌日、ウタは子どもたちに水を汲みに行くように命じた。しかし、子どもたちはウタの命令をまったく気にも留めなかった。ウタは妻に言った。「おい、おまえ、わたしのために水を汲んで来てくれないか？ 喉がカラカラなんだ。子どもたちに水を汲みに行くように言っても聞こうともしない……まったく耳を貸そうともしないんだ」。

ハウメアは水を汲みに出掛けた。ウタはハウメアが家を出るとすぐさま呪文を唱えた。

水よ干上がれ、水よ消え失せろ、  
源に戻れ、大地に沈め！

これは呪文であった。

ハウメアが水場に近づくと、水は引き上がり、さらには消え失せ、ついには干上がってしまった。「わしら三人、家を出なくちゃならない」。ハウメアが出掛けると、ウタは子どもたちにそう諭した。子どもたちは浜に降りた。またそして、ウタは自分の家の……建物や木々の茂みや厠、そして丘の上にある見張り台に向かって、もしハウメアが大声で呼びかけたら、黙っていないで、返事をするように、と命じた。そう言ってから、ウタは浜に駆け降りると、カヌーを引いて海に浮かべた。ウタと子どもたちはカヌーに乗り、帆を上げた。カヌーは海を走った。

ウタたちがハウメアから遠く離れた頃、ようやくハウメアは家へと戻って来た。「あなた、あなた、どこにいるの?」とハウメアはウタに向かって呼びかけた。

すると厠から、建物から、木々の茂みから、そして丘の上の見張り台から返事が返ってきた。ハウメアはあわてふためき、泣き叫んだ。見張り台に上がり、海を見つめた。すると、水平線の遙か彼方にカヌーが見えた。遙か彼方に見えるカヌーは小さな点のようになっていた。ハウメアは浜に駆け降り、鵜の中に入り込むと、海の波間を渡って行った。

子どもたちが浜の方を振り返ると、後ろからハウメアが迫って来るのが見えた。「父さん、父さん、邪悪な霊が僕たちの方にやって来るよ」と子どもたちは言った。

「おまえたち、どうしよう？ 霊が父さんを呑み込むぞ！」とウタは恐れ慄いた。

「父さんをカヌーの甲板の下に隠そう」と子どもたちは言った。

そう言うと、子どもたちはハウメアに見つからないようにウタを隠した。ハウメアがウタを殺す気まんまん、食べる気まんまん、ウタと子どもたちを呑み込もうと大口を開けてやって来た。「あたしの食べ物はどこだ？」とハウメアは言った。

「父さんはまだ浜辺だよ。僕ら二人は釣りに出て、風が僕たちをここに吹き流したんだ」と子どもたちは叫んだ。

「あたしは腹ぺこさ！」とハウメアは言った。

子どもたちはハウメアに焼き魚を渡した。ハウメアは焼き魚をペロリと平らげた。ところが、ハウメアはちっとも満足しなかった。「おまえたちにはたくさん魚があるのに、あたしにはちっともない」。

「母さん、母さん、火の中に母さんの食べ物がいっぱいあるよ」と子どもたちは言った。

「食べ物をあたしによこせ！」とハウメアは叫んだ。

「口を開けて！」と子どもたちは叫び返した。

子どもたちは二本の棒を使って大きな石<sup>46)</sup>をハウメアの喉に投げ込んだ。すると、その石が胃にとどいたとたん、胃は破裂してしまった。こうしてハウメアは死んだ。今でも、この鵜に姿を変えたハウメアを見ることが出来る。「ハウメア、がさつで不恰好な肉体」というのは、ハウメアを連想させる諺である。今では、このハウメアという名前は、邪悪で手癖の悪い女につけられる。

これでおしまい。

## パオワと魔女

### Ko Paowa

語り手：南島のガチ・タフ族 一八五〇年頃

むかし、パオワ (Paowa) という男がテ・ルアヒネ・マタ・マオリ (Te Ruahine-mata-maori) という年寄りの女の家を訪れた。この老婆はルアヒネ・カイ・ピハ (Ruahine-kai-piha)、あるいはルアヒネ・マタ・モラリ (Ruahine-mata-morari) として知られていた。老婆は魔女であり、クマラ (タロイモ) の呪文を知っていた。老婆はパオワとその仲間たちのために食事を用意した。パオワたちはそれを食べた。「水場はどこだい？」。食事を済ませ、喉が渴いたパオワたちが老婆に尋ねた。

「向こうだよ」と老婆は答えた。

老婆はパオワのため水を汲みに出掛けた。老婆がいなくなると、すぐさまパオワは水を干上がらせようと呪文を唱えた。そのため老婆はいつもよりさらに遠くに水を汲みに行かなければならなくなった。しばらく歩きつづけると山々が連なる場所へとたどり着いた。そして、さらに山々を越え、その姿がパオワたちから見えなくなった。老婆はなおも歩きつづけて、丘を登り、丘を降り、さらに遠くに歩きつづけ、また丘を登り、丘の頂を越え、そして丘を降りた。そして、ふと老婆が家の方を振り返ると、老婆が目にしたのは家が燃えている光景だった。

家よ燃えろ、でも倉庫は残れ！  
 聖地よ燃えろ、でも貯蔵穴は残れ！  
 庭よ燃えろ、でも垣根は残れ！  
 便所よ燃えろ、でも犬は残れ！

老婆が戻ると、家は焼け落ちていた。老婆はパオワたちが立ち去ったことを知ると、浜辺を探しまわった。それから、家に戻ると、ふたたび犬たちを連れて浜辺に引き返し、今度は犬たちをけしかけた。犬たちは海辺をクンクンと嗅ぎまわると、老婆の許へと戻って来た。「奴等はそっちに行ったのか」犬たちの様子を見て、老婆はそう考えた。

老婆はパオワを追いかけようと、大きく息を吸い込み、宝物<sup>47)</sup>を手に抱えて、海の中に飛び込んだ。

老婆はひたすら前に向かって泳ぎ、海に潜ると、長いこと潜りつづけた。海面に顔を出して辺りを見まわしたが、パオワのカヌーの影も形も見えなかった。そこで老婆はふたたび海に潜り、長いこと潜りつづけた後、ようやく海面に顔を出した。辺りを見渡したが、そこにはパオワのカヌーの影も形もなかった。そこで老婆はさらにもう一度深く水に潜った。長いこと潜りつづけた後、三度、老婆は海面に顔を出した。辺りを見まわすと、パオワとその仲間たちのカヌーが海を進んで行くのが見えた。

老婆の姿を見つけたパオワは烈火の勢いでカヌーを漕いだ。四度、老婆は水に潜った。長いこと潜りつづけた後、老婆はカヌーの近くに浮かび上がった。老婆はさらにもう一度潜り、海面に浮上すると、そこはカヌーのすぐ側であった。パオワはカヌーを繰り、陸に着けた。パオワはカヌーから飛び出して、洞窟の中に駆け込むと、他の仲間たちをそのままカヌーに乗せて、そこから立ち去らせた。

パオワが洞窟の中に入ると、老婆は洞窟の前までやって来て、指で洞窟の入り口をガリガリと搔いた。しかし、パオワが入り口を塞いでいたため、老婆は空しく入り口を搔きつづけた。パオワは洞窟の中で火をおこし、火の中に石を投げ込み、老婆に呼びかけた。「婆さん、何してるんだい？」。

「あたしはここさ！」と老婆は言った。

「ひとつご馳走させておくれよ。婆さんの食べ物ほらここさ」とパオワは言った。

老婆は食べ物をひつつかみ、食べた。「孫の食べ物はなんて美味いんだ！」と老婆は叫んだ。

「目を閉じて、口を開けておくれよ！」と言って、ふたたびパオワは老婆に呼びかけた。

老婆が口を開けると、パオワは真っ赤に焼けた石を口の中に放り投げた。さっきのような食べ物をご馳走してくれるものだと思い込んだ老婆は、焼けた石を飲み込んだ。焼けた石が胃の中に入ると、老婆は金切り声を上げ、うんうんと唸り、腋から閃光を放ちながら、苦痛に手足をばたつかせもがき苦しんだ。パオワは老婆を組み伏せ、老婆の宝物を獲った。パオワが老婆の宝物を獲るやいなや、老婆は死んだ。

この事件の後、カヌーと仲間たちが自分を残して立ち去ってしまったために、海を渡る術がなくなったパオワは足留めされ、数日の間その地に留まった。

故郷の村にたどり着いたパオワの仲間たちは人びとに、「パオワが死んだ」と語った。

そのため、マラエでは葬儀の準備がなされ、食べ物が用意された。泣き女たちがマラエに集まり、死者のために泣いた。食べ物が用意されると、山と積み上げられ、そこにいた人びとに振る舞われた。女や子どもたちはそれを背負い、家に持ち帰った。

そうこうしている間も、海を渡る術がないパオワは、どうしたものかと思案に暮れていた。そこで、パオワは丸太の中に入った。風の赴くまま、丸太は海に浮かび、海を越え、海岸に打ち上げられた。

海岸に薪を拾いに来たパオワの村の女たちは、丸太をひっくり返しては見、ひっくり返しては見て、薪になるかどうかを吟味していた。女たちはパオワの乗った丸太をひっくり返した。「そこに、おあつらえの薪があるじゃない」と女たちの一人が丸太を見つけた女に向かって言った。

「重いし、しめっているじゃない」と女は言い返した。

そこで、女たちは海岸に丸太を残し、村に戻った。そして、村の人たちに言った。「海岸に薪があったけど、持ってこなかったよ……重過ぎるし、しめっていて」。

女たちがみな立ち去った後、パオワは丸太から抜け出し、財宝を海岸に隠した。それから海岸を離れ、村に向かった。その外見はすっかり変わり果て、奴隷や乞食やみすぼらしい若者のようであった。

その時村では竈が開かれたばかりだったので、葬儀用の食べ物がいくつかの籠の中に入れられた。全ての籠がたくさん食べ物で一杯に満たされた。その食べ物の切れ端でももらえないだろうか、とパオワは村人に頼み込んだ。

食べ物を給仕していた村人は言った。「何だと、おまえはパオワの参列者たちのために用意された食べ物の切れ端をせがんでいるのか！」。

怒りをあらわにする村人たちを尻目に一人の村人がみんなをなだめて言った。「まあまあ、怒らないで……ただ食べ物をせがんでいるだけじゃないの」。

ふたたびパオワが食べ物をねだると、「よし、じゃあ、マラエから食べ物を持って来てもいいぞ。……いまや、おまえはパオワの者になった」<sup>48)</sup>と村人は言った。

「どうか油を下さい」とパオワは言った。

「まさか、油を欲しがっているのか？ 今度は油をせがんでいるぞ！ この油はみんな参列者たちのために必要なものなんだ」。

「気にしないで、油をやりなさいよ」と一人の女が言った。

そこで村人たちは油を持って来て、パオワに与えた。「どうか外套も下さい」と、さらにパオワは言った。

「そんなもの、どこから出てくるんだ？ おまえにやる外套なんてない」。

「怒らないで、外套をあげなさいよ」ところがまたあの心やさしい女が言った。

そこで村人たちはパオワに外套を与えた。またまた、パオワは言った。「どうか、頭に飾る羽根を下さい」。

「聞けよ、おまけに奴は羽根までせがんでいる！」。さらに、村人はつづけて言った。「おまえにやる羽根なんてない」。

「気にしないで、あげなさいよ」と女たちは言った。

そこで村人たちは羽根を持って来て、パオワに与えた。

そうしたやり取りの後、パオワは財宝を隠した場所に戻り、自ら油を注いだ。髪を結び、羽根で飾り、外套を着、老婆の腕から盗った財宝で身を飾った。こうして、すっかり身を整えた後、パオワは村へと向かった。

パオワが村に近づくと、人びとはその姿を見て、叫び声を上げた。「ごらんよ、立派な首長がやって来るよ……なんて綺麗な人なんだろう！」。

人びとはパオワを歓迎し、その姿を見るため、みんなが駆け寄って来た。「ごらんよ、こっちに来るよ」と人びとは口々に言った。「なんて素晴らしいんだ！」。

村中の女たちは、パオワがどれほど立派な男であるか見て知ると、誰もが口々に娘を嫁がせなければと言いつつ合った。しかし、パオワを選んだのは、他の村人たちに食べ物や外套や油や羽根を与えるように言ってくれた、あの心やさしい老婆の娘だった。

村人たちはパオワをマラエに案内し、しばらくの間じっと見つめた後、尋ねた。「あなたはいったい誰なんですか？」。

「わたしはパオワだ」。

「でも、パオワは死んだ……パオワは死んだって、ともかくあいつ等はそう言ったんだ。でもまだパオワは生きている！」。この時、全ての村人たちはみんなそう考えた。

その後、村人たちはこの若者がパオワであることを知った。そして、パオワを聖地に連れて行き、相応の儀式を執り行った<sup>49)</sup>。

## プングアレフとハワイキの人びと

### Ko Pungarehu rāua ko Kōkōmukahaunei

語り手：南島のガチ・タフ族 一八五〇年頃

むかし、二人の男<sup>50)</sup>がいた。男たちは妻と暮らしていた。男たちはカマスを捕りに海に出た。そして、男たちのカヌーが漁から戻ると、妻たちは浜に降りて、カマスを運び出し、きれいに処理した。はらわたを取り出し、紐を通して、倉庫へと運び込んだ。それが済むと、男たちと妻たちは家に戻った。

翌朝、ふたたび男たちは海に出た。そしてまた、カヌーが浜に戻ると、妻たちははらわたを取り出し、紐を通して、倉庫に吊した。それから、竈の火をおこし、カマスを料理した。こうして、すっかり食事の用意を整えると、みんなはカマスを食べた。その後、夜の帳が下り、みんなは床に就いた。

翌朝、三たび男たちは海に出た。突然風が吹き、男たちのカヌーを遙か彼方へと運び去った。長い間、カヌーは大洋の直中を走り、ようやく浅瀬にたどり着いた。男たちは浜辺にカヌーを引き上げた。火おこし棒として使えそうな木を探したが、何も見つからなかった。そこで、男たちはカマスの釣り針<sup>51)</sup>から木を取り出すと、その釣り針を乾かすために脇に挟んだ。そうこうしながら浜沿いを歩いて行くと、足跡を見つけた。人の足跡もあれば、足なえが棒のようなものでつけた足跡もあった。「この足跡をつけた奴は今どこにいるんだ？」と二人は言った。

その時、森の中からトキ (toki: 手斧) を振るう音が聞こえてきた。男たちは音のする方へ向かった。「向こうの方から聞こえてくるぞ」と二人の男たちの片割れが言った。

離れた場所から二人が様子をうかがうと、二人の男たちが休む間もなく、忙しげにトキを振るい、カヌーを作っていた。この男たちはトキを振るう間中、木屑が飛び散ると、お互いの木屑の行く先を追い、ひっきりなしにきょろきょろと目を動かしていた。

「奴等はなんて激しく目を動かすんだ、見てみろよ！」とトキを振るう男たちを見ていた男たちの片割れが言った。「奴等はただ木屑を見ているだけで、こっちを見ちゃいないさ」と、もうひとりの片割れが言った。

こうして、プンガレフ (Pungarehu) とココムカ (Kokomuka) は、お互い姿を隠しつつ、こっそりとトキを振る男たちの方へと歩み寄って行った。二人は真っ直ぐ男たちの方ににじり寄った。そして、男たちが後ろを振り返ったとたん、プンガレフとココムカは男たちをしっかりと捕まえた。それから、四人の男たちは腰を下ろした。「おまえたちはどこから来た?」。トキを振るっていた二人の男たちはプンガレフとココムカに尋ねた。

「浜の方からやって来た。風がおれたちのカヌーをここに流したのさ」とプンガレフとココムカは答えた。「おまえたちはどこから来たんだ?」と、今度はプンガレフとココムカが男たちに尋ねた。

「わたしたちはハワイキ (Hawaiki) の者だ。タフィチ・ヌイ・ア・ルア (Tawhiti-nui-arua) の者だ<sup>52)</sup>と男たちのうちの一人が答えた。「おまえたちの村はどこにあるんだ?」さらに、プンガレフとココムカはかさねて尋ねた。

「向こうさ」

こうして、知り合った四人の男たちはその場を離れ、村へと向かった。しばらく歩いた後、男たちはプンガレフとココムカに言った。「もうまもなくすると、奇妙な振舞いが始まるだろう。でも、笑うなよ。もしも笑ったりしたら、命を落とすことになる」。

さらに歩きつづけると、腰を振りつつ、ケイケイ (keikei) の花<sup>53)</sup>の上で踊りを踊るヌクマイトレ (Nukumaitore) の子孫たちと出会った。

その後、四人の男たちは家へとたどり着き、中に入った。食べ物が用意され、男たちの許に運ばれて来た。ところが、その肉はアザラシの生肉で、プンガレフとココムカはどうしてもそれを食べることができなかった。この土地の人びとは火を知らなかった。人びとは一切火を通さない生の食べ物を食べていた。プンガレフとココムカはこの家に留まり、やがて日が落ちた。男たちは先ほどよりも多くの生肉を二人に勧めたが、生肉は全くプンガレフとココムカの喉を通らなかった。食べ物が二人の許に運ばれた丁度その時、女たちが突然火打ち石のナイフを引き抜いた。それは取っ手まで鋭く研がれた石のナイフで、女たちはその鋭い

ナイフを二人にちらつかせ、歌いながら近づいて来た。

さあさあ笑う、さあさあ笑わない！  
さあさあ笑う、さあさあ笑わない！<sup>54)</sup>

しかし、プンガレフとココムカは笑わなかった。すると、女たちは家から立ち去って行った。男たちは残り、みんな眠りに就いた。翌朝、またもやアザラシの生肉の食事が用意された。村人たちはアザラシを生そのまま食べた。二人はそのままその場に座り込み、夕刻になり、ようやく二人は口を開いた。「家を塞げ」<sup>55)</sup>とプンガレフとココムカは言った。

それから、二人は火おこし棒を取り出し、火をおこした。村人たちは煙を吸い込むと、大声で叫んだ。

北東のよそのもの、誰がおまえをここによこした？  
立ち上がって、どっか行っちまえ！  
北東のよそのもの、誰がおまえをここによこした？  
立ち上がって、どっか行っちまえ！

プンガレフとココムカが火に風を送ると、火は炎となり勢いよく燃え上がった。それから、二人は竈に火を入れ、石を用意して、竈の中に並べた。そして、竈の中にアザラシの生肉を入れ、その上に石を置き、さらにその石を敷物で覆った。それからまた、二人は土を盛って竈に被せた。そうして、竈の準備がすっかり整うと、二人は竈から離れて、料理ができあがるのを待った。

しばらくして、二人が竈を開けると、湯気が立ち上がった。村人たちはそのふくよかな香りを嗅ぐと、いてもたってもいられなくなって誰も彼もみんな竈の側へと詰め寄った。「なんていい香りなんだ！」と村人たちは叫んだ。

竈からアザラシの肉を取り出し、家の中へ運んだ。村人たちは狂喜して、初めて火で調理された肉を食べた。日が暮れ、みんなは眠りに就いた。翌朝、二人はさらに多くの肉を料理した。食事の用意が整い、料理を口にした村人たちは、口々に言った。「今、初めて料理されたものを食べている。前はいつもいつも生のものを食べていた」。

「おまえたちは人ではなく、精霊だ……おまえたちは人ではない、そんな生の食べ物を食べているのだから！」とプンガレフとココムカは言った。

プンガレフとココムカはその地で暮らした。村人たちは二人に言った。「わたしたちを食べる生き物がいる。それはポウアカイ (pouakai) といって、人食い鳥だ」。

「襲ってくるのはいつだ？」と二人は尋ねた。  
「水を汲みに行く時に」。  
「そいつがやってくるのを見なかったのか？」。  
「確かにこの目で見たさ」。

プンガレフとココムカは玄関も扉もなく、たった一つの窓しかない家を建てると、その家の中に飛び込んだ。しばらくすると、人食い鳥が向って来るのが見えた。人食い鳥はだんだ

んと家の方に近づいて来た。人食い鳥はまだ遠く離れている時からずっと、首を二人の方に伸ばしていた。二人の処にやって来た人食い鳥は、くちばしをプンガレフとココムカの一方に振り下ろした。しかし、二人は斧で人食い鳥を打ち据え、つづけて翼の一つをへし折った。そして、もう一方の翼の先をへし折ると、もはや人食い鳥にはどうすることもできなかった。人食い鳥を殺した二人がその鳥たちが棲んでいた洞穴を訪れると、そこは人骨の山があった。それから、二人は村に戻り、日を暮らした。

しばらく暮らすうちに、二人は寂しくなり、故郷の妻たちが恋しくなった。そのため、二人はカヌーを置いた場所に行き、海に浮かべ、漕ぎ出した。日は落ち、夜が訪れた頃、ようやく二人を乗せたカヌーは故郷の村へとたどり着いた。二人が家に向かうと、そこはもぬけの殻で、荒れ果て、かび臭かった。「妻たちは村を去ったに違いない。さもなければ、ひょっとして死んだのかも」と二人は言った。

すると、もう一方の男の家から明かりがもれた。「妻たちはきっとあそこにいるに違いない」と二人の男たちは思った。

そこで、二人は明かりのもれる家に向かい、中に入り、座った。家の者たちはみんな眠りに就き、二人の姿を見た者はいなかった。妻の傍には男たちが眠っていた。妻たちは再婚していた。

妻の一人が夫を思い出し、泣き、そして歌った。

夕闇が迫ってくると、ハワイキにいる遠く離れた夫のことを想い、  
 思慕の念が湧き上がってくる。  
 夫の声が山々を越えてわたしの許に届くたびに、  
 悲しみが塗り替えられていく。

次の日の朝、妻と再婚相手は目を覚ました。「あの人がいる！」妻の一人が声を上げた。  
 その日から、妻たちはまた元の夫たちと暮らした。

## ヒネ・ポウポウ

### Hine-poupou

A. W. Reed, *TREASURY OF MAORI FOLKLORE*, Wellington, 1963. (p. 457)

クック海峡の横断に成功したのは、一人の女性、ヒネ・ポウポウ (Hine-poupou) ただ一人である。ヒネ・ポウポウはランギトト (ドルヴィール島) の不誠実なマニニ・ポウナム (Manini-pounamu) の貞淑な妻であった。マニニ・ポウナムは息を呑むほどの美貌の持ち主である若い女性と恋に落ちた。そのため、マニニ・ポウナムはヒネ・ポウポウを連れ出し、ラウカワ (Raukawa: クック海峡) を越えた処にある、カピチ島に置き去りにすることで旧妻との縁を切ろうとした。

ヒネ・ポウポウが島の南端ワレコフの丘の斜面に腰を下ろしていると、夫のカヌーが次第に小さくなってゆくのが見えた。ヒネ・ポウポウは夫のカヌーが見えなくなるまで見つめた。

さらに遠く離れた処に、島の頂がぼんやりと見えた。カラキア (karakia : 呪文) を詠唱し、アツア (神) に助力を求めた。神はヒネ・ポウポウに強い手足と忍耐力を与えた。カオマル岬の東四マイル (約六・四キロメートル) にあるガ・ファツ・カイポヌ (Nga Whatu-Kaiponu : ブラザー小島) に泳ぎ着くまで何時間もヒネ・ポウポウは波間を押し分けて進んだ。しばらく休んだ後、一匹の小鬼の力によってランギトトに導かれ、ついにこの八〇マイル (約一二八・七キロメートル) に及ぶ苦しい試練を終えた。ヒネ・ポウポウは夫の許に戻らなかった。ヒネ・ポウポウは必死にハブクを釣り上げようと、神々に助力を祈った。神々はマニニ・ポウナムのカヌーを沈めるため嵐を送り、そのためマニニ・ポウナムと彼が愛した若くふくよかな女性との蜜月は突然終わった<sup>56)</sup>。

### ヒネ・ポウポウとテ・オリパロアの物語

#### Ko Hinepopou rāua Ko Te Oripāroa

語り手：ウェリントンのランギ・タネ 一八五一年

ここでヒネ・ポウポウ (Hine-popou) とテ・オリパロア (Te Oripāroa) の物語を始める。二人はむかしむかしのご先祖様で、カピチに住いがあった。

テ・オリパロアとその全ての親族たちはランギトト<sup>57)</sup>に移住するため、カヌーの紐を結んだ。テ・オリパロアはヒネ・ポウポウの夫だった。ヒネ・ポウポウが夫であるテ・オリパロアに置き去りにされたのは、もとはと言えばペンギンの肉が原因であった。ことの次第はこうである。ヒネ・ポウポウはペンギンの羽をむしり、竈に火をおこし、ペンギンを料理した。しかし、ヒネ・ポウポウが竈を開けた時、肉はまだ生焼けだった。このことに男たちは不平を漏らし、ヒネ・ポウポウを叱りつけた。ヒネ・ポウポウはこれを深く恥じて、夫たちから逃げ出してしまった。ヒネ・ポウポウが逃げ出した後、テ・オリパロアと彼の弟とまたその従者たちは、カヌーを海に浮かべた。こともあろうかヒネ・ポウポウの父親のカヌーも一緒に。

こうして、全てのカヌーが、夫に捨てられたヒネ・ポウポウを一人残して、海に漕ぎ出して行った。カヌーは疾走し、海を越えて進み、ほどなくするとガ・レワイにたどり着いた。テ・オリパロアたちはその地にしばらく逗留した後、ふたたび船出した。そして、とうとうランギトトに上陸し、その地の村へとたどり着いた。

ヒネ・ポウポウがカヌーのあった場所へ戻ると、すでにそこにはカヌーはなかった。ヒネ・ポウポウはこのことにひどく落胆し、力なく肩を落とした。ヒネ・ポウポウはカピアの村に留まった。空腹をおぼえて、食べ物の残り滓を探しに竈に向かい、隅っこをあさった。竈の中からシダの根っこを見つけ出し、それを食べようと腰を下ろしたその時、もっとよいやり方があることに気がついた。ヒネ・ポウポウは今、食べようとしていたシダの根っこを口から取り出し、水に浸し、すっかり乾燥した根っこを水に戻した。

三日後、ふとあることを思いついたヒネ・ポウポウはタレレ・マンゴ (Tarere-mango)<sup>58)</sup>へと向かった。タレレ・マンゴに着くと、丘を降り、海岸でカッティーグラス (toetoe) を見つけ出した。花茎を引き抜き、呪文を唱えてから、ヒネ・ポウポウは花茎を空に向かって

放り投げた。ヒネ・ポウポウは花茎が風に流される様をじっと見つめた。すると、ほんの一瞬花茎は空を舞い、それからくるくると回転しながら地に落ちた。ヒネ・ポウポウはその光景を見て、まだ自分が進むべき道がはっきりしないことを知ると、ふたたび村に帰って行った。

三日後、ふたたびヒネ・ポウポウはタレレ・マンゴに赴き、花茎を引き抜き、呪文を唱えると、空に向かって放り投げた。花茎は鳥のように飛び去った。ヒネ・ポウポウが花茎の飛跡をじっと見つめていると、花茎はさらに遠くへと飛び去り、ついに視界から消え去っていった。

これを見たヒネ・ポウポウは、これで自分が進むべき道がはっきり示されたと思った。そこでヒネ・ポウポウは服を脱ぎ捨て、それらを山と積み上げると、クワの腰巻一枚だけを身につけた。この腰巻は表が赤で裏が白だった。それから、ヒネ・ポウポウはガ・クリ・ア・クペ<sup>59)</sup>に赴くと、呪文を唱え、海に飛び込んだ。ヒネ・ポウポウの身体はまるで子どもたちが船遊びする浅皿のように海に浮かんだ。何としたことか（アナー：anā）！ 身体が浮かんだのだ！

ヒネ・ポウポウは幾昼夜もラウカワ<sup>60)</sup>を漂った。満ち潮がカピチへと引き戻し、引き潮がオメレ（Omere）<sup>61)</sup>の海岸に引き寄せた。長い間、波間を漂いつづけ、ついに一月が過ぎた。なんとまあ驚いたことに（カーオレ）！ ヒネ・ポウポウの片側はすっかり腐り、フジツボがぎっしりと生えていた。ヒネ・ポウポウは身体を反転させ、さらに波間を漂った。幾昼夜かが過ぎ、タカ・コツク（Taka-kotuku）<sup>62)</sup>にたどり着いた。タカ・コツクは、ワイヒ（Waihi）とピリカワウ（Pirikawau）の間に突き出している（この岩はラウカワの丁度真中にある）。ヒネ・ポウポウは息を整えるためにこの岩に登り、身体を休めた。そして、身体が回復すると、ふたたび幾昼夜も身体を波間に浮かべ漂った。そして、ランギトトとトカ・ポウレワ（Toka-pourewa）<sup>63)</sup>の間にあるガ・タイ・ファカホキホキ・ア・パネ（Ngatai-whakahokihoki-a-Pane）までたどり着いた。

満ち潮がこの方角にヒネ・ポウポウを引き戻し、引き潮がランギトトから海へと連れ出した。ヒネ・ポウポウは海から出て、パレラウト（Parerautu）と呼ばれる岩に登り、身体を休めた。そして、腰巻を手にとると、白い部分をハプクがいる場所に、赤い部分をタニファがいる場所に投げ入れた。その後、岩から海草を引き抜き、腰巻を作った。

ヒネ・ポウポウが丁度その場所にいる時、ハプクが跳びあがった。タニファが立ち上がってハプクに噛みつこうとしたが、捕まえ損なった。今度はタニファが跳びあがると、ハプクが跳びあがってタニファを捕まえた。つまりは（アラール：arā）、ハプクがタニファの尻尾に食いついたのだ！ その場所では、こんな不思議な出来事がいつも起きていた<sup>64)</sup>。

ヒネ・ポウポウは三度海に入り、波間を漂った。そしてついに、ファカ・テ・パパヌイ（Whaka-te-papanui）にたどり着いた。なんとまあ（カーオレ）！ ヒネ・ポウポウの身体の半分はすっかり腐っていた。そこでヒネ・ポウポウは、波間を漂いながら、身体に日の光を当てた。そして身体の半分がすっかり温まると、今度は反転してもう片側を温めた。しばらくすると、ヒネ・ポウポウの身体はすっかり元通りになった。ヒネ・ポウポウは海岸の方に向かって泳いだ。そして、パパアナウ（Papaanau）に上陸した。この地はオタラワオ（Otarawao）の近くにあり、ヒネ・ポウポウを置き去りにした夫や父親の住む村があった。

ヒネ・ポウポウが村に向かうと、父親と母親がヒネ・ポウポウを想って、声を上げて泣いているのが聞こえてきた。そこで、ヒネ・ポウポウは家の窓口に行き、しばらくそこに腰を降ろした。そして一呼吸おいた後、右手を父親の顔に差し伸ばした。「誰だ?」。父親はびっくりして起き上がると、母親に尋ねた。

「知りませんよ」と母親は答えた。

ふたたび父親と母親は床に就いた。またしばらくして、ヒネ・ポウポウは手を差し伸ばした。父親はその手を見て、家の中に引き入れた。そして、その手の主が誰だろうヒネ・ポウポウだと識ると、父親はさめざめと涙を流した。

「わたしがここにいることを口にはいけません」とヒネ・ポウポウは言った。

さて、まゝ（カーオレ）！ 翌日まだ日も上がらぬうちに、両親は聖地に赴き、呪文を唱えた。日が昇り、儀式を終えると両親は家に戻った。そこに丁度、哭泣の儀式を執り行いに古老たちがやって来た。「ヒネ・ポウポウ、ヒネ・ポウポウだ!」叫び声が上がった。

その叫び声は夫であるテ・オリパロアの家まで届いた。テ・オリパロアはその叫び声を聞き、言った。「ヒネ・ポウポウは人ではない、精霊だ!」と。

「おまえはどうやってここまでやって来たのだ?」と、ヒネ・ポウポウと対面したテ・オリパロアが尋ねた。

テ・オリパロアはヒネ・ポウポウを置き去りにされたことを恥じ入るようなそぶりを見せた。そこで、二人はまた一緒に暮らしたが、一月もするとテ・オリパロアはヒネ・ポウポウのことを、ふたたびぞんざいに扱うようになった。「おまえたちのカヌーを紐でしっかりと結んでおきなさい」とヒネ・ポウポウは弟たちに言った。

弟たちやテ・オリパロアやその従者たちのカヌーの紐が結ばれた。あれまゝ（カーオレ）！ 海は穏やかで、テ・オリパロアと従者たちのカヌーはみな海へと繰り出して行った。本当に多くの者たちが海へと出て行ったのだ！ ヒネ・ポウポウは跳び上がると、弟たちのカヌーに乗り込み、カヌーを海に漕ぎ出させた。やがて、浜が見えなくなり、見えるのは山の頂だけだった。

「ここはどこなんだ?」と弟たちはヒネ・ポウポウに尋ねた。

「漕ぎつづけなさい!」とヒネ・ポウポウは答えた。

ヒネ・ポウポウたちがさらに漕ぎ進むと、海から突き出した岩が見えてきた。ヒネ・ポウポウはカヌーをそこに停泊させると、テ・オリパロアたちのカヌーを待つ間、岩をじっと見つめた。

すると一匹のハプクが跳び上がった。タニファが跳び上がってハプクを捕まえようとしたが、捕え損なった。今度はタニファが跳び上がった。ハプクが跳び上がってタニファを見事捕まえた。つまりは（アラー）、ハプクがタニファを捕まえて食べたのだ！ それから、ヒネ・ポウポウはそのハプクとタニファを海の中に沈めた。「しゃべるな！ わたしが知っているのは、なすべきことだけだ!」とヒネ・ポウポウは親族たちにそう呼びかけた。

その後、ヒネ・ポウポウたちは岩の方に漕ぎ進めた。ヒネ・ポウポウはカヌーの錨を手に取ると、海に投げ入れた。「釣り糸を垂らせ!」とヒネ・ポウポウは叫んだ。

釣り糸を垂らすよりも早く、二匹の魚が餌に食いつこうと跳び上がった。すぐさまヒネ・ポウポウたちはその魚をカヌーに積み込んだ。まもなく、テ・オリパロアとその弟たち、さ

らにその従者たちのカヌーがヒネ・ポウポウの方にやって来た。「カヌーを脇によせなさい、そこにはタニファがいる」とヒネ・ポウポウはテ・オリパロアたちに呼びかけた。

ヒネ・ポウポウがテ・オリパロアたちを待っていると、テ・オリパロアたちはヒネ・ポウポウの方にやって来て、カヌーの錨を海に投げ入れた。テ・オリパロアたちが集まると、ヒネ・ポウポウはテ・オリパロアの弟の一人に向かって、「釣り糸をよこしなさい」と呼びかけた。

テ・オリパロアの弟がヒネ・ポウポウに釣り糸を渡すと、ヒネ・ポウポウは手で鼻を打ち、血を餌に混ぜた。たちまち魚が釣り糸に群がってきた、一度に二匹も。ヒネ・ポウポウは餌を手に取り、岩に触れてから鼻から流れる血に触れた。そして、その餌を空に向かって振り回しながら海に投げ入れた<sup>65)</sup>。

それから、すぐさまヒネ・ポウポウたちは錨を引き上げ、甲板に乗せた。風が巻き起こり、テ・オリパロアたちのカヌーは吹き散らされ、ちりぢりに吹き飛ばされてしまった。さらに風が巻き起こり、テ・オリパロアたちのカヌーをひっくり返した。こうして、テ・オリパロアの一族は全て波に呑み込まれてしまった。ヒネ・ポウポウは陸に引き返した。テ・オリパロアの従者たちと弟たちはみんな死んでしまった。こうして、ヒネ・ポウポウは恨みを晴らした。

テ・オリパロアと弟のマニニ・ポウナムは死ななかった。カヌーがひっくり返るよりも早く、風が吹いて、二人を遙か遠い大洋にまで流した。またたく間に数日が過ぎ、そしてついには一月が過ぎた。一緒にいた仲間たちはみんな次々に病に伏せ、病にかかっているのは、とうとうテ・オリパロアとマニニ・ポウナムだけになった。カヌーはなおも疾走しつづけ、さらに時が過ぎた。すると、ミヤコ鳥の鳴き声が聞こえてきた。「陸地が近いのかも」と、テ・オリパロアとマニニ・ポウナムは言い合った。

そして、やがてカヌーが海草の上を滑り始めると、「きっと、陸地はすぐ近くだ」。そう二人は思った。

二人は竿を出してカヌーを進めた。しばらくすると、ミヤコ鳥がカモメに向かって何やら鳴き声を上げているのが二人の耳に届いた。「陸地だ。間違いはない」。そう二人は言い合った。

そして、とうとうカヌーの船底が水底に触れた。テ・オリパロアはカヌーから跳び出して、梁をつかみ、カヌーを陸に引っ張り上げた。浜辺に降り立った二人は地面に火おこし棒をしっかりと固定して、火が点くまでもう一つの棒と何度も前後にこすり合わせた。火種をおこし、薪をくべると、火は燃え上がった。二人はムラサキ貝を集め、火にくべ、料理した。ほどなくムラサキ貝に火が通った。二人は病に冒された仲間たちの許に戻ると、彼らを火の側まで連れて行き、ムラサキ貝を手にとって、病人の喉に流し込んだ。すると、一人また一人と息を吹き返し、やがて仲間たちが全員起き上がるようになった。

ついで、テ・オリパロアが罫を仕掛けた場所に行くと、ツイ (tui: 鳥の名。エリマキミツスイ) が掛かっていた。テ・オリパロアはツイを焼き、仲間たちに与えた。それを食べるや、仲間たちの病はすっかり治り、また以前のようにみんな元気を取り戻した。

そこで、二人は浜に引き上げていたカヌーを海に押し進め、海に浮かべると、ふたたび船出していった。一人はタイアハ (taiaha: 長剣) を、もう一人はトコトコ (tokotoko: 棍

棒)を携えた。二人は岬から岬へと自分たちが通って来た方向に進路をとった。やがて、とある洞窟の入り口に差し掛かった。二人がその洞窟の中に入ると、中では一人の老婆が座って鯨を食べていた。「どこから来たのか? 東からか? 西からか?」。二人を見た老婆はそう呼びかけた。

老婆は四方八方くるくると回った。「おまえたちはわたしの一族かい?」。老婆は二人に尋ねた。「そうだ」<sup>66)</sup>と二人は答えた。

その二人の言葉を聞いた老婆は、二人に鯨の肉を差し出した。そこで、テ・オリパロアは火をおこそうと火おこし棒を手にとると、その火おこし棒を足<sup>67)</sup>でしっかりと押さえてもらうため、老婆にそれを手渡した。テ・オリパロアが木をこすり始めると、煙もまだ出ていないうちから、老婆はビックリ仰天して、叫び声を上げた。「燃えている……ハワイキが燃えているよ!」<sup>68)</sup>。

老婆は気を失って倒れ、へどを吐いた。

テ・オリパロアが罌を仕掛けた場所に行くと、ツイが罌にかかっていた。テ・オリパロアは老婆の許に戻り、ツイを焼いた。そして、その脂を手にとり、老婆の喉に流し込んだ。すると、老婆は生气を取り戻した。テ・オリパロアは老婆にツイを与えた。「おまえたちの食べ物はなんて美味いんだ!」と老婆はおそろおそろツイを口にすると、そう漏らした。

「ここではどんな食べ物を食べているんだ?」と二人は老婆に尋ねた。

「生のままさ」と老婆は答えた。

この地に住む人びとは食べ物を火で料理することを知らなかった。

「おまえの親類・縁者たちはどこにいるんだ?」とテ・オリパロアは尋ねた。

「みんな飲み込まれてしまったよ」と老婆は言った。

「何に?」。

「何にだって? ポウアカイ<sup>69)</sup>にだろうさ」。

「何だい、そいつは?」。

「鳥さ、でっかい鳥さ……とてつもなくでっかい奴さ。翼がそれぞれ一〇<sup>ひろ</sup>尋もある。そいつがあたしたちを食い尽くししまったのさ。あたしをたった一人残して」。

「そいつはどこにいるんだい?」と二人は尋ねた。

「ハワイキの丘が一〇も連なっている場所さ」と老婆は答えた。

二人は仲間を呼び寄せるために、一旦仲間の許に戻ると、事の次第を話し合った。それからまた、テ・オリパロアは老婆の許に戻り、「どうやったらそいつをやっつけられるんだい?」と老婆に尋ねた。

「さあね、知らないよ」と老婆は答えた。

「獲物に近づいたら、いったいそいつはどうするんだい?」。

「奴は獲物を見つけると、翼を伸ばしてひっ捕まえて行ってしまうさ」。

「どうすればいいのかが分かったぞ。家を一軒建てなくちゃな、こんなふうな。木々の先っぽだけを切って、そいつを家の中央の柱に据えるんだ。でも、家の四方は地面の中でまだ育っている木々から作るんだ」とテ・オリパロアは言った。

こうして、テ・オリパロアたちは家を建て始めた。家の土台と屋根ができあがるとその中央に鳥の翼がからまるように柱を据えた。この家の長さは一六尋、幅は九尋<sup>70)</sup>。そうして、

とうとう家ができあがった。

「今度はおまえさんたちがどんだけ早く走れるか見せてくれなくちゃ」。家がすっかりできあがると老婆はそう言った。

丁度そこにテ・オリパロアの仲間たちがやって来た。仲間たちは衣服を脱ぎ捨て、まずは仲間のうちで、最も足の早い者が走った。「どうだい婆さん、早いだろう?」。走り戻って来た男が言った。

「まだまださ」。

一人、また一人と仲間たちは自慢の足を披露した。そうして、とうとう仲間たち全員が走り終えた。「おまえさんも走らなくちゃいけないよ」。仲間たちの走りを見た老婆は、テ・オリパロアに向かってそう言った。

そこで今度はテ・オリパロアは走った。走り戻って来たテ・オリパロアは老婆に尋ねた。

「どうだい婆さん早いだろう?」。

「いや、おまえさんもまだまださ」老婆は言った。

老婆はこの結果にひどくがっかりした。そこで今度はテ・オリパロアの弟マニニ・ポウナムに向かって言った。「おまえさんも走らなくちゃいけないよ」。

マニニ・ポウナムは衣服を脱ぎ捨てると、タイアハをひつつかみ、刹那のうちに走り去って行った。マニニ・ポウナムの足はまるで鳥のように跳び、瞬く間に走り戻って来た。

「おまえさんだ。もう一度走ってごらん」と老婆はマニニ・ポウナムに言った。

ふたたび、マニニ・ポウナムは走った。その時、テ・オリパロアが火おこし棒を取り、火をおこし始めた。まあ驚いたことに(カーオレ)! マニニ・ポウナムは老婆の許に戻る間に、七つもの岬を越えたが、戻って来た時には、まだ火はおこってはいなかったのだ。

「おいで、さあ、おまえさんが行かなくちゃいけないよ。おまえさんが走らなくちゃいけない。四番目の丘の峰に行ったら、そこに腰を降ろして、息を整えるんだ。下の方に魚を掬い上げる生き物が見えるだろうよ。おまえさんは叫び声を上げて、そいつをここまで誘い出すんだ」。老婆はマニニ・ポウナムに向かって、そう告げた。

マニニ・ポウナムは走り出した。丘を駆け登り、丘を駆け降りた。そしてとうとう老婆が言っていた丘にまでたどり着いた。下の方を見下ろすと、魚を掬い上げる生き物が見えた。まず翼の一方を水に押し入れ、魚がその翼を乗り越えようとしたその瞬間、ポウアカイは首を魚に振り下ろした。もう一方の翼を伸ばし、水に押し入れ……と、ポウアカイは同じことを繰り返していた。

マニニ・ポウナムは丘から叫び声を上げた。しかし、その声は初めポウアカイには届かなかった。ところが、突然ポウアカイはマニニ・ポウナムの方に向かって突進し始め、マニニ・ポウナムをつかみ上げようと翼を伸ばした。マニニ・ポウナムは足を跳ね上げ、猛然と走り出した。すぐ背後にポウアカイを引き連れて、丘を駆け上り、駆け降りた。マニニ・ポウナムとポウアカイは走りつづけ、とうとうあの家に通じる尾根までやって来た。

「タアイアハ!」(taaiaha: それっ!)<sup>71)</sup>とマニニ・ポウナムは叫んだ。

仲間たちは、マニニ・ポウナムの叫び声を聞いた。なおもマニニ・ポウナムは走りつづけた。そして、あの家にたどり着くや、すぐさま、片側の戸口から中に飛び込んだ。ポウアカイがマニニ・ポウナムを捕えるより一瞬早く、マニニ・ポウナムは家にたどり着き、すんで

のところでマニニ・ポウナムは虎口を逃れた。ポウアカイは翼で家を打ち据え、押しのけようとしたが、家はびくともしなかった。家は頑丈に建てられていたのだ。そこでポウアカイは翼を家の中にぐいっと押し入れた。しかし、ポウアカイが翼を家の中に押し入れるや、男たちは武器を振り下ろし、翼を切り落としてしまった。そこでポウアカイはもう片翼を家の中に押し入れた。すると、またもや男たちは武器を振り下ろし、翼を切り落とした。ポウアカイは切り落とされた翼の付け根の部分をはたつかせた。ポウアカイは少し距離をおくと、翼の付け根をはたつかせ、振り回した。ふたたびあの家に戻ると、首を家の中に押し入れた。三度、男たちは武器を振り、ポウアカイは倒れ、死んだ。

男たちがポウアカイの胃を切り開くと、その中には死んだ人の骨とグリーンストーン<sup>72)</sup>があった。こうしてポウアカイは死んだ。

## 注

- 1) エルズドン・ベスト (Elsdon Best) は、「ヒネ・タクルア (Hine-takurua: 冬の乙女) が大地母と住むようになると、チオ・ロア (Tio-roa) が水を凍らせると、またマエケ (Maeke) が大地を凍らせると、太陽から温かさがなくなる。その時、キキヒは寒さと飢えて死ぬ。しかし、ポボコルアが避難した家の中はなんと暖かく快適でたくさん食べ物が貯えられていることだろう!」と記している。(Best, Elsdon. *Maori Religion and Mythology*, Dominion Museum, Wellington. 1924. p. 219)
- 2) 一般的に女性は婚前であっても情事が許されていたが、少数の高貴な身分の女性は、部族に有利な結婚が決まるまで、厳しく監視された。マオリの恋物語は大抵こういったような高貴な身分の女性に関してのものであった。これが女性たちの誇りと威信の源となっていた。
- 3) ダーツは細長く、軽い木の棒で長さ約三フィート (約九一・四センチメートル)。大人も子どもも、ダーツやコマ回しや凧揚げを楽しんだ。しばしばこのような競技を競い合う目的のために大集会が開催された。
- 4) ここ「霊の跳ぶ処」と言われる場所から、死者の霊はこの世界から地下の世界に行くと言われていた。ここは北島の北西端レインガ岬にある。rere はここでは跳ぶと訳されているが、飛ぶ、あるいは降りると訳することもできる。  
ヒネ・ヌイ・テ・ポは神話的な人物で、「地下の大媛」または「夜の大媛」という意味。ヒネ・ヌイ・テ・ポはいつも地下の世界に住んでいて、死者の霊を受け入れる。
- 5) ブランコや高い棒からなる「大跳躍」(これはしばしば川を越えて曲げられる) のこと。木などのてっぺんにロープを結び付け、その上に乗り、ロープを揺り動かして遊んだ。だが、ここで記述されているようなブランコはなかった。
- 6) Dixon (pp. 75-8) はこの話をハワイの類似した、ヒク (Hiku) とカウエル (Kawelu) という恋人たちの物語と比較している。ヒク (Hiku) とフツ (Hutu) の名前には関連性がある。ハワイの語 (k) はマオリ語の (t) と同音である。ハワイの物語では、ヒクは人里離れた場所で母に育てられた。母から離れると、ヒクは魔法の矢を射て、その後を追った。これを繰り返すと、矢はヒクをカウエルの許へと導いた。カウエルはヒクの矢を隠し、ヒクはカウエルの隠した矢を見つけた。二人は恋に落ち、結婚した。ある日のこと、カウエルの願いに反して、ヒクはカウエルを残し、母に会いに行く。悲しみのあまり、カウエルは死んだ。ヒクは地下の世界からカウエルの霊を連れ戻そうと決意する。ヒクとその友人たちは長いロープを結び、それを伝えてヒクは地下の世界へと降りて行った。地下の世界には人びとが住んでおり、カウエルはその人びとの中にいた。人びとはロープに乗ってブランコを楽しんだ。ヒクは上にいる友人たちに合図を送ると、友人たちはロープを引っ張った。カウエルは蝶に変身してヒクから逃れようとしたが、ヒクはココナッツに変身してカウエルを捕まえた。そしてカウエルの遺体のところに戻り、カウエルの霊をその中に押し込んだ。  
また違ったマオリ人の物語のヴァージョンでは (Hongi: pp. 116-9) では、ハワイの話とさらに似かよったものとなっている。
- 7) ヨーロッパ人の入植以前、妻は婚姻後に夫の名前を自分の名前につけることはなかった。
- 8) この話と歌は広く流布しており、特にワイカトではよく知られている。ガタ (Ngata) (1959: pp. 128-9) はガ・プヒ族 (Nga-puhi) とはかなり異なる歌を紹介しており、マクリーン (McLean: pp. 38-41) はこの歌を音楽に編曲して発表した。ショートランド (Shortland) (1882: pp. 47-50) とコーワン (Cowan: p. 142) はルアラングが祭司たちから聞いた話を紹介している。それによるとルアラングの妻は祭司たちの呪文や赤土や甕からの湯気…… (「料理された食べ物に対する畏れは大変なものである」) など妖精たちを退けた。また違

うヴァージョンではルアランギはいなくなった妻と森で出会う。ところが、妖精が妻にかけた魔法のため、妻は夫のことが分らない。そこでルアランギは料理された食べ物を妻に触れさせ、それによって魔法を打ち破る。これはここで取り上げた物語の中で、ルアランギが豚を料理するのと同様の理由である。豚や鳥を狩ることについての言及はもちろんヨーロッパ人の入植後の付け足しである。ヨーロッパ人入植前には、焼け石で水を沸騰させるために「コーファ」(Kōhua) という無骨な木の器を使っていたが、この鉢(コーファ)はヨーロッパのものである。

- 9) 別れの後、またちょっとした別れの時でさえも、その身内が互いに挨拶を交わす時のように哭泣するのが慣わしであった。ある人がいないことの証も、おそらくこれと同じように挨拶を交わすことであった。ある話の中で、ある妹は行方の分からない兄の足跡を見て、座り込んで泣く。
- 10) サメの油を混ぜた赤土は木の彫刻や村の大切な建物を塗装するために用いられた。人びとは男も女もこれを顔に塗った。

マオリ人の民話では家の棟木は、死者の霊が生者を訪ねる時に現れる場所であり、また超自然界からの客人が空に消え去る前に立つ場所である。祭司たちの中には腹話術を用いる者がいたが、時折、そうした者たちは祖霊の声(金切り声や口笛)などを聞かせる夜会を開いた。それらの声は屋根から響いてきた。

- 11) この歌の最後の行で挙げられている人びとの名前は妖精の長になったと言われている人びとの名前である。ハミルトンの南およそ一四マイル(約二二・五キロメートル)にあるピロンギア山は妖精たちの主な棲み処の一つであると信じられていた。このことは、この物語を収集したリチャード・ティラーがつけたこの物語のタイトルの中にも述べられている。

チレニは普通「ニュージーランド」の訳であるニウ・チレニ(Niu Tireni)を短縮したものと解釈されている。しかし、この歌はもともとはヨーロッパ人入植以前のもので、そのためおそらくこれは比較的近年の解釈であろう。ホアニ・ナヘ(Hoani Nahe)のヴァージョン(p. 31)では、チランギ(Tirangi)という言葉が代わりに現れる。チランギはベスト(1925: p. 869)が集めたフェアリー・ソングの中でも言及されている。この歌の後半を記録したガタ(1959: pp. 124-7)は、チタンゲ(ガタの語り部はこう呼んだ)は妖精たちが集まる場所の名前であると述べている。フェアリー・ソングの中のチランギに関しては注21参照。

- 12) アワルア(Awarua)は、カイコヘ(Kaikohe)の南およそ二マイル(約一九・三キロメートル)オタウア(Otaua)はヒヒオトテが住んでいたと言われる場所で、アワルアの北西およそ一〇マイル(約一六・一キロメートル)、マタラウア(Mataraua)はアワルアとオタウアの間にある。
- 13) ポココファ(pokokohua)はウポコ・コーファ(upoko-kōhua)の略である。これは非常に不吉な呪いの言葉で、この呪いの言葉の続くのに従い敵の頭を保存した。
- 14) ロナはまだ月におり、木とひょうたんを手にした姿で見ることができると信じられていた。ある地域では、ロナのフルネームはロナ・ウァカ・マウ・タイ(ロナ、潮を操る者)であった。

他者の中傷しようとする者は(マオリ人は他者の侮辱に対して短気であったため)、「ロナの轍を踏むな」という諺をもって、この予測される結末を思い出す。

- 15) タニファに助けてくれと呼びかけると、その者にマナがある限り……タニファは溺れる者を救い、岸まで運ぶと信じられていた。このようにタニファは祖霊とみなされていた。

この話のように、往々にして鯨もまた同様の役割を持っていた。チニラウは神話の人物で魚と釣りに密接な関係を持つ。鯨はチニラウのペットであると言われていた。

- 16) デイヴィス(p. 182)はrākauをここでは'heap'と訳した。また、明らかに'rotten heap'を意味するこのpopo rakauという表現はグレイ(1928: p. 118)にも見られる。ウィリアムズ(p. 321)はtai whakarākauを'long swell'(波濤)と定義した。そして、テ・ウェツ(p. 104)の物語の中では、まず初めに女性は作っている歌の内容を心の内に模索し、そしてその後、歌を編曲し完成させる。whakarākauはここで歌を推敲し、編纂し、さらに適切な表現を'heaping up'する過程について触れている。また似た表現、kōrero rākauは「声に出して考える」である。tā rākauは外套につけられたタニコという縁のへりである。満月Rākau-nuiという言葉と、月が欠ける時の十六夜の月Rākau-matohiという言葉と比較している。

- 17) ショートランドの写本では、話者はしばしばイニシャルだけで判別される。

- 18) フーイアは今では絶滅した種で、ミツスイ科に属する。フーイアは濃緑色で尾の先に白い輪がある。この尾羽は非常に価値があった。重要な儀式の時、高位の人びとは髪にその羽根をつけた。白サギの羽根も非常に価値があり、髪につけた。ラウカワの木や葉、スペアグラスの樹液やコフフの木の樹液などは、その甘い香りが珍重された。これらは匂い袋に入れて用いられ、重要な儀式の時に、これらの葉を家々の中に撒いた。マネフという植物は詳細不明だが、明らかに香りをつけるために用いられていた。ショートランドの翻訳(1854: pp. 57-8)では、コーブラ(kōpura)は「球茎や塊茎」という意味だと述べられている。ウィリアムズはこれに賛同しながらも、この植物の名前を判別不能としている。しかし、ショートランドがコーブラをコーブル(kōpuru: 香りをつけるために用いられた匂い苔)と聞き間違えた可能性がある。

- 19) ショートランドによれば、この言葉は諺。
- 20) ホワイト (1887~90. v: p. 68) は、このタニファを捕まえる方法について記述した伝承的な話を出版している。「編まれた」家(おそらくは亜麻で編まれた)は、いかだの上に置かれ、その内にネズミイルカの肉を置いた。このいかだは浮遊するように仕掛けられた。タニファがこの肉の匂いを嗅ぎつけ、この仕掛に入ると、人びとはこれを待ち構えて殺した。
- ウレイア(ガチ・タマテラ族に属するタニファ)は、今のオークランド地域に住むタイヌイの人たちに殺されたとホワイトも記述している(v: pp. 65-8, pp. 144-5)。(あるヴァージョンでは、ウレイアはマヌカウ族の首長に招かれ、タヌカウに赴いた。)このためマウカウの人たちはガチ・マル族(ここでは密接な関係を持つガチ・タマテラを含んでいる)に攻撃され、多くの人たちが家を追われた。
- ガチ・マル族とガチ・タマテラ族はハウラキ(今のハウラキ平原)に住んでいた。マヌカウの港はオークランドの西海岸、プボンガ岬はこの港の北側にある。
- いくつかの物語が、ある部族のタニファが他の部族のタニファを殺し、それが発端となり戦いが始まるという物語について語っている。
- 21) この物語を収集したジョージ・グレイ(1956: p. 226)は、「テ・フェロフェロはこの歌を完全に覚えていなかったのではなく、これでこの歌は完結している」と注釈をつけている。テ・フェロフェロはワイカトの高位の首長で、後にポタタウの名前と肩書きを受け継ぎ、初のマオリ王となる。
- 別の歌の中でチランギは妖精が集う場所と歌われている。注11参照。
- 22) 宗教儀式において、霊に食べ物を捧げる場所は、たいてい木で組まれた小さな枠の上であった。
- 妖精は宝物の姿形を盗ったが、宝物の実質はそのまま残した。ataはここでは形と訳したが、影という意味にもとることができる。
- 23) ジョージ・グレイ(1853: p. 83)は同様の儀式を書き記したマオリ語のテキストを出版したが、hukiという言葉は使っていない。このような場合、この儀式は明らかに死者の血をもって執り行われた。この凝固した血がふたたび液体となり、祭司に神託を告げた。‘Ahahoa kua maraoke ngā toto, e rewā anō ngā toto, te hinu rānei.’「血は乾いてしまったが、血か油は浮かんでくる」。グレイのテキストではこのようになっている。おそらく本テキストの中の tārewa は同様の意味だろう。グレイによると死者の霊は頭に羽根飾りをつけて、祭司たちが呪文を唱えている時か、または眠りに就いている時にやって来る。この時、祭司たちは死者を殺した者が誰なのかを知り、それによって死を償わせることができた。
- アオパエは死体(特に探している者が殺された時)に導くものとよく言われている。
- 24) ツヌイ・オ・テ・イカは神であり、彗星や隕石の形をして現れ、凶事の前触れであると言われていた。
- 25) タラタの薫り高い葉と花、またレモンウッドの木は化粧油として用いられていた。
- 26) 時に地位のある人物は身体を洗う特別な池を持っていた。彼らはその長い髪を梳り飾り立てる時、その池を鏡として用いた。ガララは巨大なトカゲと考えられていた。そのため、人びとにはガララに髪があるなど到底想像もつかなかっただろう。話し手と聞き手は、あたかも貴公子のように語るガララと醜い爬虫類の生き物との間にある大いなる不調和・不一致に十二分に気づいていたことは間違いない。梳るために用いられる二番目の池は、この状況の不調和と滑稽さを促している。
- 27) Mātua という語は両親や年長者たち、親の世代の親戚たちを指すのだろう。ここでは男系の年長者を意味するものと思われる。Tungāne は兄弟と訳されるが、妻の男系の親類も指すことができる。ここでもその意味で用いられている。
- 28) フベケチアが誰であるのか、また何であるのは解らない。この歌の三行目の残りは強意の言葉で締めくくられている。
- 29) これらの場所はハウケ湾にある。モツ・オ・クラは今はベアー島と言ひ、キッドナッパー岬の南にある。ブケチチリはモハカ川の支流イナンガタヒ川の源流にある。別のヴァージョンでは鱗や尻尾は逃げて、もっと小さな怪物やトカゲになった。
- 30) Mārō は腕を伸ばした時の手から手までの長さ。一 kumi は一〇 mārō で、およそ六フィート(約一八二・九センチメートル)。
- ウィリアムズ(p. 156)は kumi に「巨大な空想上の爬虫類」というもう一つ別の意味をみている。女がどんなガララか、ドラゴンのようなトカゲか、どんな生き物が尋ねた時、女はそれに名をつけ、それは kumi であると言う。そのあとで、「ガララは一 kumi であり、家もまた一 kumi であった。ガララが身体を伸ばすと丁度家と同じ長さであった」ことが分かる。もしこれが洒落でないとしたら(そんなことあるまいが)、女の説明はこの生き物の長さを述べたものであったことは間違いない。実際に、怪物たちは大概この大きさであると言われる。ヒネ・ボウボウとテ・オリパロアの物語でも、怪鳥の翼は各々一 kumi である。おそらくこの言葉は常に長さを表すものであろう。ウィリアムズは解説書によってこのように誤解した。
- 31) 魚とトカゲ(伝説上のガララも含む)は疎遠な関係にあると信じられていた。この文の字義的な意味は「ひ

- よっとすると、義兄たちはこの「魚」と戦いをおっぱじめたいのか?」。この物語の別のバージョンでは、ガララは迎え入れられた時、その歓迎の言葉にしばしば異議を唱える。
- 32) 有名な諺。
- 33) レワレワの木(ニュージーランド・スイカズラ)の開いた葉は、船首と船尾を含め寸分違わずマオリ人のカヌーの形をしている。これがカヌーの原型であったと言われている(White, 1856: p.5)。
- 34) Punawaruという言葉は、水音に混じって聞こえてくる精霊の声で、凶徴であった。Whiti kaupekaという言葉の意味は解らない。Tiekeはここでは目的地にたどり着いたことを意味する。宗教歌ではoiは歌の目的が叶ったことを、またこれから起きる出来事のクライマックスを意味する。最後の行は意味が不明瞭で、翻訳から省略された。この別の歌については、Phillipps (p.116) 参照。
- 35) 類似した言葉の比較から、purakuはここでは料理小屋か、あるいはもっと粗末な倉庫を指すものであると考えられる。おそらくこれは料理小屋であろう。それはこの少年が料理を手伝わされていたことから分かる。これは少年に向けられた最大の侮辱であった。次の二つの言葉はpurakuという言葉に関係している。pūr-ekuはウィリアムズ(p.313)によって「料理小屋」と「粗雑な外衣」という両義が与えられた。そして、pūr-ekuは「木の枝に置いた死体を木の皮や草蓆などで覆うこと」と定義された。この物語の写本の別の箇所には、死んだ首長はカニウァという名のpurakuに埋葬されると記されている。ウィリアムズはこの一節を持ち出して、この言葉が「棺桶または死体を覆うもの」であると結論づけたが、この意味の言葉はporekuである。首長が埋葬されたと言われるが、この場合、遺体の安置は地面の上であったはずである。このような形式の墓が一般的であった。Pōrukuruは、死体を安置する場所に関する別の言葉で、木の中のことを指す。また、この言葉は睡眠小屋という意味にも用いられる。
- 36) このTohiの儀式が全ての子どもたちに対して行われたことは明白であるが、子どもの身分が高い場合、この儀式は特に重要であった。父親はこの儀式に参列しなければならなかった。この儀式は普通、生まれてすぐに行われるが、少年タウチニ・アフィチアが生まれる前に父親がいなくなってしまったため、これまで儀式を行うことができなかった。
- 鳥籠の中に閉じ込められたさまざまな種類の鳥たちが登場するが、話すことを教えられたのは唯一ツイだけであった。
- 37) 一八七二年、大集会が開かれ、そこでガチ・ポロウ族(Ngati Porou)とその周囲の部族は英国政府から送られた巨大な旗をはためかせる旗竿の下を行進することによって、ヴィクトリア女王への忠誠心を宣誓させられた。ある男がこの宣誓を拒み、チエケがしたようにハカを歌いながら旗竿から逃げ去ることで、不服従の意を表明した。この事件において、チエケはジャック(つまりはユニオン・ジャック)の訳として理解された。ハカの最後の言葉は旗から逃げ去るチエケの行動と一致している(Fowler: p.10)。
- これはすでに存在していたハカの言葉に対する再解釈であった。このような解釈と翻案はごくありふれたものであった。この踊る泥棒の物語は一八七六年に書かれたが、実際にはこれよりもっと古い。
- 38) コレンソ(1880: p.56)はheruwiをここでは大首長と訳している。また、明らかにこの言葉のこの意味での使用は、グレイ(1857: p.104)にも見られる。これはheru iwi(骨の櫛)に由来するものかもしれない。身分の高い人びとはこの骨の櫛を髪に挿した。この物語のheru(櫛)もheruiwiの短縮形として用いられていた。このことから、とり憑いた霊は首長であった。
- 39) 釣りをする時、こうした魚のよくとれる漁場での暗礁は普通、丘の位置や海岸のその他の目印を記憶することで、位置を特定していた。イフ・ラヒラヒは水面に上がった後、この暗礁の位置を確かめるために、数々の目印を記憶した。
- 40) よく知られているように、夏は食べ物の貯えの少ない時期で、どんな些細なものであっても、また、いかなる食べ物であっても有り難がられた。もしかすると、ルアトナの仲間がいつものように遺体を食べられなくなかったのは、この者たちがテ・ハラタウにつながる者であったからであろう。しかし、ルアトナは、身の毛もよだつような台詞を吐いて、その遺体を食べた。この表現はおそらく諺であった。
- この暗礁に関するもう一つの説明(Smith, 1910: p.215)において、カプア・ランギはワイピロ湾のワイカワの沖合にあったと言われている。ここは東海岸のトコマル湾の近くにあり、この物語の中でもこのことに触れている。スミスはここで書かれている出来事を述べたかったのかもしれないが、ガチ・ワイタハ族の支族であったガチ・コペカ族の人びとがハワイキを発って、マタアホのタイハラケケに上陸したが、後にテ・ワヒネイチの部族の者たちがこの暗礁で釣りをしていることに腹を立て、この地を去った、と述べている。
- 41) 字義的に解釈すると、プロコ・アウアヒという名前は「煙に囲まれた」という意味。この名前はこの物語の出来事と関連しているのではないだろうか。
- 42) ヲアウとは、ヒ克蘭ギ山の南を流れる川とトコマル湾とワイピロ湾の内陸部を表す地名である。小川の名として物語にあるポウツルは、今はその近くにある土地の一区域の名前。パレカウアエもその地区の地名である。かつてはこの山地の多い土地は、鳥の罾を仕掛ける絶好の場所であった。

- 43) タウマハの呪歌は、食べる前に、食べ物にかけられたタブを取り除くために唱えられた。この儀式はいつも鳥や魚やクマラなどの初物に対して執り行われた。
- 44) ここで「妹」や「弟」と訳されるこの言葉は従兄弟を表わす時にも用いられていた。ある男の tuāhine は妹だけではなく女性の従兄弟も表わす。これは結婚可能な女性をも含む（また従兄弟やもっと遠縁の女性など）。しかしながら、ここではこの意味に解釈ことはできない。なぜなら、この少年がこの姉と一緒に暮らしている間柄だったからである。  
姉とともに暮らし、姉の夫にひどく扱われる少年の話はマオリ人の伝承の至るところ（例えば White (v: pp. 142-4) )に見られる。
- 45) 身内の頭のシラミを取るには、相当繊細な注意を払うが、しごくありふれた仕事であった。それというもの頭はタブであったからである。マオリ神話のいくつかのヴァージョンでは、マウイ (Maui) はシラミを取るふりをしている間に義弟のイラワル (Irawaru) を犬に変えてしまった。
- 46) ホウメアが呑み込んだこの石は、初めに子どもたちが魚を焼いた火の上に乗せていたもので、真っ赤な焼け石であった。実際には、沖で魚を釣る時、カヌーの中で火をおこすことはなかった。しかし、怪物が焼け石を食べさせられるというモチーフはよくポリネシアの物語に見られる。  
燧火の竈では焼け石の上に食べ物を乗せて調理した。
- 47) テ・ルアヒネ・マタ・マオリの「宝物」は明らかに魔法の力を持っている。一般的な意味として Kura は赤い羽の外套を含め、赤い貴重なもの（時に「貴重なもの」を意味するが）も意味する。パオワが後に人びとの前でこの衣服を着たと伝えられていることから、ここではこの意味で用いられていると思われる。
- 48) この意味は明らかに食べ物を与えること、またそれを受け取ることで、姿をやつしたパオワが奴隷として人びとの保護下に入ったことを示している。しかし、この一文は少々曖昧である。ともすると、ホワイトが原文を書き変えたのかもしれない。Tau tangata 「美しい人」は誤植かもしれない。
- 49) Kimua はここでは重要な宗教的な儀式を行う聖域を表わしている。マオリ語のテキストの中で触れられているこの儀式の正確な実像は知られてはいないが、この趣旨は、立場や地位によって引き継がれる神聖な義務（タブ）の負担を取り払うことであろう。
- 50) この物語のマオリ語のテキストは、ウォーラーズによって収集されたが、ホワイト (II: pp. 30-4) によって出版された。ウォーラーズ版訳 (1875: pp. 108-10) には人の名前が記されていない。ココムカハウネイ (Kokomukahaunei) はホワイトのマオリ語のテキストにのみ記載されているタイトルである。この物語は常に Pungarehu mā 「プンガレフとその仲間たち」を話題としている。
- 51) ウィリアムズ (p. 250) は pāri をカヌーの両舷に付けられた「アウトリガー（波よけ板）」と定義した。ウォーラーズはこれをここでは「バラクター（カマス）の釣り針として用いられた木の部分」と訳した。
- 52) ハワイキは人がやって来て、また死後に帰る異界であった。タウィチ・ヌイを文字通り訳すと「はるか遠方」、タウィチ・ヌイ・ア・ルアはハワイキに関連した名前である。
- 53) ウォーラーズが同地区で収集したこの物語のもう一つのヴァージョンでは、ヌクナイトレの子孫（またはヌクナイトレ族）はこの島の住人であるとなっている。彼らはケイケイの花の上で妖艶な舞を踊り、人間ではないと言われている。彼らには頭がなく、胸と尻しかない (White II: p. 10, Wholers 1875: p. 122, しかしこれは正確な訳ではない)。あるポリネシアのヴァージョン（例えば、Gudgeon, 1904, p. 265）では、この島の住人は全て女性で、一人の男がこの島にたどり着いた時、誰もがこの男と夫婦になりたがった、と伝えられている。これがヌクナイトレが妖艶な舞を踊る、また別のヴァージョンで胸と尻しかない理由であるに違いない。  
ケイケイは蔓状の灌木、しばしば妖精たちがこの花の中に住まうと言われている。
- 54) この物語のほとんどのヴァージョンで、漂着した人たちは人びとの中から妻を娶る。その代わりにここではヌクナイトレの子孫たちと妖艶な舞を踊る女性たちに出会う。二人は女たちを笑わなかった、というのも笑ったら殺すと警告されたからである。女たちが踊る間、もし笑ったなら、間違いなく殺すかのように、女たちは火打ち石のナイフをちらつかせた。これらのナイフは、人らしい出産方法を知らない女性たちが妊娠した妻のお腹を切開するために火打ち石を用いたか、あるいはそうするぞと脅したか、いずれかで、どちらも他のヴァージョンの話の名残である。  
この話は、女性が妖艶な舞いを踊り、カエ (Kae) を笑わせるというカエの神話の出来事に類似している。ウォーラーズによって記録されたこのカエの神話のヴァージョン (1874: p. 52) では、この意味で用いられる言葉は、kōhiti。この類義語、ka kōwhiti はこの本文の中に見出される。この意味における用例についての論文は、ヨハンセン (1958: p. 52) 参照。
- 55) ホワイトのテキストは、ka ki atu rāua ki a Pungarehu mā、「彼らのうちの二人がプンガレフとその仲間に行った」。ホワイトは、常に彼のマオリ語のテキストをある程度手を加えて、人びとが挙げた人名と人称代名詞をしばしば取り替えた。ここでもホワイトがそのように手を加えたようで、もともとは ka ki atu rāua

- ki a rāua、「彼ら（二人の男）は互いに言い合った」である。
- 56) この物語のもう一つのヴァージョンでは、マニニ・ポウナムのカヌーは遙か遠くに流され、アイトンガの棲む島にたどり着く。これはブンガレフとココムカの伝説と著しく類似している。
- 57) ランギトトは今はドルヴィーユ島と呼ばれ、南島の北、ベレラス・サウンドの近くにある。カピチ島は北島からおよそ五〇マイル（約八〇・五キロメートル）離れている。  
長い航海に出る前にはカヌーのトップ・ストレイク（船首の外板につらなる板）の紐を新しく結び直した。
- 58) カピチ島の南端の岩。
- 59) ガ・クーリ・ア・クペ（Ngā-kūri-a-kupe）「クペの犬」はカピチ島の海岸にある岩々か崖であろう。神話的な人物であるクペがこの島を発見したと言われている。クペはウェリントン地区の多くの名所と結び付いている。  
この一節にあるこの浅皿はひょうたんを薄切りにしたものから作られている。
- 60) クック海峡。
- 61) オメレは今はテラフィチ（Terawhiti）と呼ばれている。ここは、北島の南西に面した今で言うところのテラフィチ岬の上にある尾根である。かつて、あるマオリ人がこの地を見つけた。そこからはクック海岬が広く見渡せる。
- 62) パカウエラ（Pakauwera）（p. 98）が五〇余年あまり後に語ったこの物語のあるヴァージョンでは、ヒネ・ポポ（Hine Popo）（そう呼ばれている）はクイーン・シャルロット海峡の入り口にあるトカ・コツク（Toka-Kotuku）と言われる岩の上で休息した。  
ベストはこのパカウエラの話記録した。ベスト（1901: pp. 123-5）は、「わたしが語り部にこの女性が……（クック海峡を）泳いで渡ることができると思うか、と尋ねたところ、語り部の答えは単純明快、〈おいおい、ヒネ・ポポがわたしや貴方のような普通の人間だと思っているのかい？ そんなわけない！ ヒネ・ポポは、古の時代のこの世では、ごくありふれた力、あたかも神のような力を持っていたのさ〉と。  
また、パカウエラはベストに言った。「ヒネ・ポポは時折われわれの前に姿を現す、近年でさえ。時々、海岸にいる時やラウカワの崖を越える時に、遙か彼方の海から顔を出し、波間を漂うヒネ・ポポや海水で長い髪を洗うヒネ・ポポの姿が見られる」とも。
- 63) トカ・ポウレフは今はステファン島と呼ばれ、ドルヴィーユ島の北にある。
- 64) ヒネ・ポウポウは絶好の釣り場を見つけた、後にヒネ・ポポとその親族たちはここで大量のハブクを釣り上げた。  
タニファは越自然の力を兼ね備えた伝説上の海の生き物。ハブクがタニファを食べるといふこの出来事は、ハブクが普通の魚ではないことを示している。というのも、タニファがハブクにとって天敵以上の生き物だ、と普通は思われるからである。異様に大きく強力なハブクのことを語った他のマオリ人の「釣り話」がある。
- 65) タニファは嵐を呼ぶことができると信じられていた。岩の片側にタニファが、またもう片側にハブクが潜んでいた。ヒネ・ポウポウは夫の一族をタニファが住む片側に誘い、魔法をかけた。そのためタニファは嵐を呼び出し、これにより夫の一族は殺された。  
餌に鼻血を用いるということに関して、釣り上げた巨大な魚が北島になった、という話の中のマウイの役割をここではヒネ・ポウポウが演じている。  
精霊に捧げられたものは、しばしばこのように空に翻された。
- 66) このエピソードはタファキとマウイの神話の中にもいくつかのヴァージョンが見られる。いずれの場合も、どこから来たのか尋ねたり（女性が盲目であれば）、四方をくんと嗅いだりして、女性は漂流者がどの方角から来たのか暴こうとする。女性が漂流者が来た方角を知り（大抵、漂流者は西からやって来る）、漂流者が自分に連なる者であることが分かると、それに応じて漂流者たちをもてなす。
- 67) 儀式的に火をおこす時、女性は下に置いた棒を足で押さえ、地面の上しっかりと固定した。
- 68) この物語の出来事は、マオリ人の神話的な「故郷」であるハワイキで起った。ハワイキを訪れ、そこで生の食べ物を食べる人びとと出会うという漂流者の話は広く知られている。普通、漂流者はこの地の住人の中から妻を娶る。この物語のパカウエラのヴァージョン（pp. 98-104）では、この老婆には娘が一人おり、その娘をマニニ・ポウナムの妻として嫁がせた。そのお礼として、マニニ・ポウナムは怪物をこの家に誘い入れ、殺した。  
ヒネ・ポウポウの物語は、とある地方の漂流者の物語が付け加えられている。マオリ人の民話では、巧みに泳ぐ女性に関する多くの物語があるが、巧みに泳ぐ男性に関する物語はない。これらの話のいくつかは一般に実際にあった事として受容されている。しかし、たとえ全てが伝説ではないとしても、その大部分は伝説である。例えば、有名なヒネモア（Grey, 1956: pp. 183-91）や類似したテ・フフチの物語（Fletcher: pp. 31-5）は明らかにヒネ・テ・イワイワの神話と関係している。彼女は恋人であるチニラウが住む島に泳いで渡った（White, II: pp. 121-43）。

- 69) このポウアカイを殺すという地方的な話は、ハワイキを訪れた漂流者の物語という有名な物語に付け加えられたものである。この話は、他のヴァージョンでは、「プンガレフとハワイキの人びと」の中にも見られる。南島の多くの地域では、ポウアカイと呼ばれる巨大な人食い鳥を殺すという物語が数多くある(例、Stack: pp. 63-4)。また、サウス・ウェストランド (Skinner: pp. 146-7) では、ポウア・ハワイキ (Poua-Hawaiki) という鳥と英雄プカレフ (Pukarehu) というヴァージョンで知られている。(「プンガレフとハワイキの人びと」のプンガレフは本当はプカレフとすべきであろう。ウォーラーは北島の方言で書き直した。) これらの物語は、ポウアハオカイ (Pouahaokai) ポウハオカイ (Pouhaokai)、またはポウアオカイ (Pouaokai) の神話的な物語と関連しているのかもしれない。このポウアハオカイは、ハワイキに棲むと言われる生き物で、マツク・タンゴタンゴ (Matuku-tangotango) という大きな人食い鳥の仲間がいると言われていた (White, I: pp. 78-83. Ngata, 1961: p. 156)。本書の中にあるように、ポウアカイは獲物 (kai) を網にかけ、掬い上げる (hao) と言われる。この記述はもしかすると、ポウア・ハオ・カイ (これを後に短くしてポウアカイ) という名は文字通りに解釈するべきなのかもしれない。
- 70) 長さ九六フィート (約一五四・五キロメートル)、幅六七フィート (約一〇七・八キロメートル)。一スパンまたは mārō 人が腕を伸ばした時の長さ、つまりおよそ六フィート (約一八二・九センチメートル)。一レンジまたは takoto は立った状態で腕を上へ伸ばした時の足から腕までの距離、七・五フィート (約二二八・六センチメートル)。
- 71) おそらくこれは単なる叫び声。
- 72) 怪物 (大抵はタニファカガラ) を殺す話では、死んだ怪物の腹を開くと、腹の中から殺された者たちの遺骸とともに身につけていたグリーンストーンの装飾品が見つかる、としばしば言われている。ドラゴンが守る秘宝はドラゴンを倒すことにより得られる、という太古から広く流布する信仰の一つのヴァージョンだと思われる。

#### Works cited

##### 略称

JPS: *Journal of the Polynesian Society*

TPNZI: *Transactions and Proceedings of the New Zealand Institute*

BEATTIE, HERRIES, 1920. 'Traditions and Legends Collected from the Natives of Murihiku', *JPS* 29: 128-38.

—, 1957 (ed.). *Folklore and Fairy Tales of the Canterbury Maoris*, Dunedin (Otago Daily Times).

BECKWITH, MARTHA, 1940. *Hawaiian Mythology*, New Heaven (Yale University Press).

—, 1944. 'Polynesian Story Composition', *JPS* 53: 177-203.

BEST, ELSDON, 1901. 'Te Whanga-nui-a-Tara', *JPS* 10: 107-65.

—, 1905. 'Maori Medical Lore', *JPS* 14: 1-23.

—, 1925. *Tuhoe, the Children of the Mist*, New Plymouth (Avery).

—, 1925. *The Maori Canoe*, Wellington (Government Printer).

BUCK, SIR PETER, 1949. *The Coming of the Maori*, Wellington (Whitcombe and Tombs).

COLENSO, WILLAM, 1880. 'Historical Incidents and Traditions of the Olden Times, pertaining to the Maoris of the North Island, (East Coast), New Zealand', *TPNZI* 13: 38-57.

—, 1881. 'Historical Incidents and Traditions of the Olden Times, pertaining to the Maoris of the North Island, (East Coast), New Zealand. Part II', *TPNZI* 14: 3-33.

COWAN, JAMES, 1921. 'The Patupaiarehe: Notes on the Maori folk-tales of the Fairy People, part II', *JPS* 30: 142-151.

DAVIS, C. O. B., 1855. *Maori Mementos*, Auckland (Williamson and Wilson).

DIXON, ROLAND B., 1916. *The Mythology of all Races: Oceanic* (Vol. 9), New York (Cooper Square Publishers).

FLETCHER, H. J., 1926. 'The Story of Te Huhuti of Te Roto-a-Tara', *JPS* 35: 31-5.

FOWLER, LEO, 1961. 'Te Rakau I Mataahu', *Te Ao Hou* (Wellington), 37: 9-12.

GRAHAM, GEO., 1946. 'Some Taniwha and Tupua', *JPS* 55: 26-39.

—, 1946a. 'He Tango-Raoa', *JPS* 55: 116-22.

GREY, SIR GEORGE, 1853. *Ko Nga Moteatea, me nga Hakirara o Nga Maori* (2nd edn), Wellington (Stokes).

—, 1854. *Ko Nga Mahinga a nga Tupuna Maori*, London (Willis).

—, 1855. *Polynesian Mythology*, London (Murray).

—, 1857. *Ko Nga Whakapepeha me Nga Whakaahuareka a Nga Tipuna o Aotea-Roa*, Cape Town (Solomon).

- , 1928. *Nga Mahi a Nga Tupuna* (3rd edn, ed. H. W. Williams, with additional matter from the Grey MSS), Wellington (Board of Maori Ethnological Research).
- , 1956. *Polynesian Mythology* (3rd edn), Christchurch (Whitcombe and Tombs).
- GUDGEON, W. E., 1895. 'The Maori Tribes of the East Coast of New Zealand', Part II, *JPS* 4: 17-32.
- , 1904. 'Nuku-mai-tore, the Manihiki Version', *JPS* 13: 265.
- HONGI, HARE, 1896. 'Te Tangi a Te Rangi-Mauri mo Tonga-Awhikau', *JPS* 5: 113-20.
- JOHANSEN, J. PRYTZ, 1954. *The Maori and His Religion In Its Non-Ritualistic Aspects*, Copenhagen (Ejnar Munksgaard).
- , 1958. *Studies in Maori Rites and Myths*, Copenhagen (Ejnar Munksgaard).
- KIRTLEY, B. F., 1955. *A motif-index of Polynesian, Melanesian, and Micronesian narratives*, Ann Arbor (Michigan University Microfilms).
- KOSKINEN, A. A. AND HATFULL, A. F., 1959. 'Hika', *JPS* 68: 277-83.
- MAIR, CAPTAIN GILBERT, 1923. *Reminiscences and Maori Stories*, Auckland (Brett).
- MCLEAN, MERVYN, 1965. 'Transcriptions of Authentic Maori Chant: part five, *Te Ao Hou* (Wellington) 52: 38-41.
- NAHE, HOANI, 1894. 'Maori, Tangata Maori', *JPS* 3: 27-35.
- NGATA, APIRANA T., 1930. 'He Tangi na Rangiuia mo tana tamaiti, mo Tuterangiwhaitiri, *Te Wananga* (Wellington) Vol. 2, No. 1: 21-35.
- , 1943. *Souvenir of the Ngarimu Victoria Cross Investiture Meeting*, Whitcombe and Tombs (published anonymously).
- , 1949. 'Nga Moteatea vol. three' (supplement to *JPS*. Third instalment, in *JPS* 58).
- , 1959. *Nga Moteatea*, Part I, Wellington (Polynesian Society).
- , AND PEI TE HURINUI, 1961. *Nga Moteatea*, Part II, Wellington (Polynesian Society).
- PAKAUWERA, E. W., 1894. 'Ko Hinepopo', *JPS* 3: 98-104.
- PHILLIPS, W. J. 1966. *Maori Life and Custom*, Wellington (A. H. and A. W. Reed).
- SHAND, ALEXANDER, 1896. 'The Moriori People of the Chatham Islands', Chapter 10, *JPS* 5: 195-211.
- SHORTLAND, EDWARD, 1854. *Traditions and Superstitions of the New Zealanders*, London (Longman, Brown, Green, and Longmans).
- , 1882. *Maori Religion and Mythology*, London (Longmans, Green).
- SIMMONS, DAVID, 1966. 'The Sources of Sir George Gray's *Nga Mahi a Nga Tupuna*', *JPS* 75: 177-88.
- SKINNER, H. D., 1912. 'Maori Life on the Poutini Coast, together with some traditions of the Native's', *JPS* 21: 141-51.
- SMITH, S. PERCY, 1900. 'Wars of the Northern Against the Southern Tribes of New Zealand in the Nineteenth Century, Part V' (supplement to *JPS* 9).
- , 1910. *History and Traditions of the Maoris of the West Coast*, New Plymouth (Avery).
- , 1910. 'The Moriori People of the Chatham Islands', *JPS* 19: 206-17 (published anonymously).
- , 1912. 'He Korero Tahere-manu no Turanganui', *JPS* 21: 90-2 (published anonymously).
- , 1913. *The Lore of the Whare Wananga*, Vol. 1, New Plymouth (Avery).
- STACK, JAMES W., 1877. 'Sketch of the Traditional History of the South Island Maoris', *TPNZI* 10: 57-92.
- TAYLOR, RICHARD, 1870. *Te Ika a Maui* (2nd edn), London (Macintosh).
- TE WHETU, KARIPA, 1897. 'Kametara and his Ogre Wife', *JPS* 6: 97-106.
- WHITE, JOHN, 1856. *Maori Superstitions*, Auckland (Williamson and Wilson).
- , 1874. *Te Rou, or, The Maori at Home*, London (Sampson Low, Marston, Low and Searle).
- , 1887-90. *The Ancient History of the Maori*, 6 vols. Wellington (Government Printer). (In references to the work the date is not given, but roman numerals refer to the volume concerned. Unless otherwise stated, page references are to the Maori text.)
- WILLIAMS H. W., 1957. *A Dictionary of the Maori Language* (6th edn), Wellington (Government Printer).
- WOHLERS, J. F. H., 1874. 'The Mythology and Traditions of the Maori in New Zealand', Parts 1 and 2, *TPNZI* 7: 3-53.
- , 1875. 'The Mythology and Traditions of the Maori in New Zealand', Part 3, *TPNZI* 8: 108-23.
- A. W. Reed, *Maori Fables*, London and Prescott, 1964.